

平成十九年十二月

ドウダニンミン3

竹
下
徹

まえがき

表題の「ドウダンミン」は、類（ほほ）緩むキャラクター性ある与論語で、意味は、「ひとりよがりな考え・思い」が最も近い。

与論の昔ことや体験・思ったことなどを綴った前拙著が受けたのは、まったくのムイヌパー（思いもよらぬこと）だった。本を読みそうもない（失礼）高齢者から「私が知らないことがいっぱいあった」とか、二十代の若者から「面白い」という声などがあつた。それに舞い上がり、ひまにまかせてまたパソコンをたたいた。昔のことはひよんなときひよこっと思ひ出されるものである。与論語を多用し、カタカナ書きが多くて読みづらい。言葉にはそれ独特の意味、味わいがある。それを活かすためである。与論島にコンパスを立て、過去にも回して書いた。高校野球のような時事的なことについて、他人には価値のないことだと思つたが、与論島男の目・思いとして載せた。その時々思いつき雑文で、しかもドウダンミン男丸出しである。

読んでくすりとでも笑つていただければ幸甚の極みである。

目次

ミシユフガ	4
ササ入れ	7
三月三日	1
ハミゴウ遊び	1
グージャー(鯨)	5
ウンニーマイ	8
アマン	2
あやかる	3
イイジマハンドウ	2
カルパトウ	9
ヤンバル	2
ヤギ	6
グー・具	3
貝	8
魂	4
パラチ(親戚)	4
シニグ	0
	7
	3
	5
	7

グシヤヌヲウギ	6
魔目	6
ウンワラビ	3
マーブイ	6
マーブイユシ	6
グシヨウ(後生)	7
チュラプニ(清ら舟)	7
枕飯	3
ユイタバ	0
輪廻転生	7
ハンシヤ	9
プツテイル	8
Xデー	3
鐘が鳴る	0
墓碑の向き	0
サーシマグトウ	6
道しるべ	3
子育ていろは	1
	0
	8
	1
	0
	8
	1
	4
	4

植福	1	4	0
島流し	1	4	3
先輩の加護	1	4	6
花咲じいじい	1	4	9
足の裏	1	5	2
お蔭様	1	5	5
お蔭様(続)	1	5	9
笑顔	1	6	2
敬老長寿	1	6	5
気心腹己人	1	7	0
命	1	7	3
イシヤイラズ	1	7	6
従心	1	7	9
綻び・繕い	1	8	2
プリナップ	1	8	5
放すと話す	1	8	8
赤ちゃんポスト	1	9	1
高校野球は面白い	1	9	4

年季奉公	1	9	8
鏡	2	0	1
世間は己の鏡	2	0	4
花を花と見て花と	2	0	7
ウラ・ワヌ・ユ一	2	1	1
国民性	2	1	4
騎馬戦	2	1	7
猿	2	2	0
疑われたこと	2	2	3
親ヌプリムヌ	2	2	6
風	2	3	1
誠一筋	2	3	3
参考著書	2	3	4

ミシユフガ

トウラが中学生だった昭和二十七年以前のニワトリは、文字通り庭で放し飼いされる「庭鳥」だった。鶏は林の中に巣を作り卵を産んだ。その巣を見つけた子どもは、手柄になり親からほめられた。鶏は巢に毎日一個ずつ卵を産む。一腹で多いときは二十数个産む。巢から卵を取るときは、必ず一個は残して取る。全部取ってしまったと鳥は翌日からその巣を放棄して別のところで産む。一個だけ残して置くと毎日産み続ける。残して置く一個の卵を「ミシユフガ」という。

あるとき、林の中で雌鳥が、くっお、くっおと異様な声で泣き叫んでいた。トウラが近づいてみると雌鳥は羽を逆立て興奮していた。大きなマツタブ（アカマタ蛇）が卵をねらって近づいているところだった。先の割れた赤い舌を出し、左右にペロペロ動かしていた。トウラもびっくり、怖かったが勇気をふるい、付近の木の枝を探して蛇に襲いかかった。かねて蛇をたたくときは、頭をたたかなければ効き目はないと聞いていたので、頭にねらい定めて思いつきり打ち据えた。棒

は折れ、蛇はのたうった。次の瞬間蛇は反対方向にくねくねと逃げていった。一発パンチを浴びせただけでダメージはなかった。トウラは、膝ががくがくふるえて、折れた棒を握りしめて見送るばかりだった。仕留められなかった残念さより、自分に向かつてこなかった安堵感が胸に広がった。再び棒を探して追いかけてようという気持は湧かなかった。

あのマツタバの野郎懲りずにまた来るだろうと、ミシユフガも残さずに全部持ち帰った。そのことを家族に話したら、「蛇は仕返しに来るものだそうだよ」とまた脅かされた。

雌鳥は卵を産んだあとに「コケーコッコ」と鳴くことがある。それを聞くと巣を探し、卵をいただきに行った。ときにはあの雌鳥近頃見かけないなと思っっているうちに、ひよこをぞろぞろ連れて出てくることもあった。

ひよこにならないシムイフガというのものもある。これは、無精卵であったか暖め方の具合が悪かったかである。親鳥が放棄した巣に卵が残っているとき、卵が腐っているかどうかを見分けるためには、手に挟

んで太陽にかざしてみせるものだった。赤みがかつていのはマフと
いった。腐っているのは黒ずんで見える。その色で鮮度が分かった。
全く腐っているのは黒くて臭い。それを割ったりしようものならその
くささたるや鼻がひん曲がるほどである。

雄鳥は、きれいな声で「くつくうくう」と長く引いて朝まだきの
時を告げた。一羽が鳴けば、もう一羽が鳴き、隣の家のものも鳴き、
遠くからも聞こえてくる。そんな静かでのどかな遠い昔があった。雌
鳥はこの鳴き方はしない。たまに狂ったように昼間この鳴き方をする
ことがある。「ミードウイヌウターボーワッサン（雌鳥が歌うと不吉な
ことが起こる）」という言い伝えがあり、嫌われる。

自分で育てた雄鳥を抱いて、喧嘩をさせて廻った。雄鳥の前に鏡を
置くと写った自分に飛びかかっていた。飛びかかろうとしないとき
には、わざと鏡にぶっつけるといやが上にも飛びかかっていた。だ
った。中学時代の道楽だった。

夜のとぼりを破る雄鳥の鳴き声やミシュフガはシムイになって久し
い文明の世の中である。

平成十九年九月記

ササ入れ

大潮の干潮時にパーギタ（環礁の外海側）のチブ（潮水のたまっている窪み）にササイリテイ、ウマヌパナなど小魚をおどり出させて捕った。「ササイリ」とは、ミーミジンクサ（ルリハコベ）やパツタイマチギ（トウダイグサ）などの毒草をたたいて毒汁を出して使う一種の麻酔漁法である。弟が、ササイリ用に植えたデリスの枝葉をつかって、二人でその漁をしたことがある。飛び出してくる魚を捕まえるのは、子どももの結構な遊びでもあった。小さいものから先に飛び出してくる。大きいほど毒の回りが遅くなる。

テイララキのナーシハンバラの下はガーマ（洞穴）になっていて潮が引くとチブみたいになる。そこへある人が、旧暦三月の大潮の日に、ウンポーダいっぱいのミーミジン草を担いできて、石でたたき、ササ入れをした。しばらくしたらアイナー、ニームシ、イヤービキ、サビチラ、ニーバイ、プシク、サジ、ババなどが、ガーマからふらふらと次々に出てきた。その人は手早く網ですくって、ウンポーダに入れた。

大漁だった。あらかたとりおわり、もうそれ以上出てきそうになかった。その人は、そばで見ていた少年・ハニガマに「後は君が捕っている」と言い残して、ウンポードを担いで帰って行った。

しばらくすると、ガーマの中から大きなユナジニーバイがふらふらと出てきた。ハニガマは難なくそれを捕まえた。シーノー（ひも）をえらぶたから口に通して担いで帰った。肩にかけて魚の尻尾が地面に付くほどの大きなものだった。

遠くの岩陰で、潮干狩りを終えた婦人三名が、持ってきたムツチャーなどを広げて食べ、しゃべりながら坐っていた。一人が「アリヤーヌーダラガ、タルダラガアリヤー（あれは何だろー、誰だろー）」と言った。残り二人もそちらを見た。ややあつて「アリヤー、ハニガモーアランヌイ？（ハニ少年ではないか）」と言った。聞いていたもう一人は、「もしや」と思い、近くのわが家に行ってみると、大きなユナジニーバイが横たわっていた。びっくりすると同時に、ハニガマを呼んで「でかしたね。ウシヤギムヌ（海の神からの賜り物）だから、海に持ち返ってあの人たちにも分けてあげようね」と言った。ハニガマは素

直に「うん」と応じた。

さつそく海に持ち返り、「あのガーマの主だったんだね」と話ながらさばき、四等分して分け合つた。五十数年前の与論の豊かな海、分け合い心のあつた頃の物語りである。

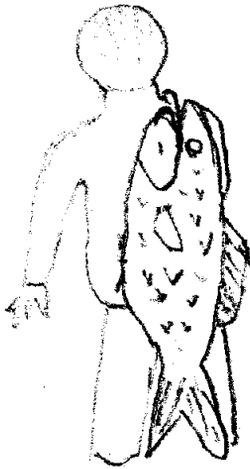
ピシバナ（環礁）には、外海からイノー（内海）へ通ずる溝がある。そこは魚の通り道なので、そこに網を張り魚を捕る。それをマチャン（待ち網）という。三月三日の浜下りのときは、「サンガチャブリ」といわれて海がしけることが多いので、その二・三日前にこのマチャンをしてあらかじめ準備する。マチャンの場所には占有権があり、その昔は占有者でなければできなかった。名前も付けられていた。

その昔、先述のナーシハンバラの漁占有権をめぐり、三月三日の浜下り組とシニユグ組との間で、喧嘩があつたそうである。

潮が引くとピシバナの上にはいた魚は、イノーへ降りる。その通り道を「マタ（股）」という。潮時を見計らつてそこにマチャンをする。マタと限らなくても、弓形に大きく網を張り、二、三人で上の方から石

を投げたりして魚を追い落として漁獲している。アイナー、二―ムシが主に捕れる。浜で焼きビヤースーをして一杯やるのは、にわかウミンチュ男の人生の至福どきである。

ともあれ、与論の海がとみにやせ衰えてきたと、誰もが嘆くようになった。その原因は分からないが、漁獲物は、「ウシヤギムヌ」と言っていた。ウシヤギムヌとは、海の神様からの賜り物という敬虔な心から出てくる言葉である。その心が無くなったのが原因の一つではないかとドウダンミンされる。これは、与論に限ってということではなく世界中の人がである。



平成十九年一月記

三月三日

旧暦の三月三日は、老若男女海に行き、潮干狩りや漁労に勤しむ。これはその昔、先人達が海に食料を求めた名残とも受け取れる。この日は大潮にあたり、船主がピシバナ（沖のリーフ）に渡してくれた。乗り切らないときは往復して瀬渡しをしてくれた。

男たちは追い込み漁をする者、素潜りで鮪や魚を捕る者ありで、捕れたものは全部浜で焼いたり、刺身にしたり、焼きビヤースーにした。りする。トウラが行くトウマイの浜では、祭り人が祭り石にモチと酒を供え、航海安全と豊漁を祈願する。シートを敷き、浜にいるみんなで車座になり、料理したものを配り、家から持参したプチュムツチャー（よもぎ餅）やウブシ（ふくれ菓子）などを交換仕合つて祝宴である。

新生児のいる家の三月三日は、女兒は新ソイガマ、男児は新テイルガマによもぎ餅などを入れて、草鞋を履かせて行き、足を海水につけ、ミーハマクマシ（新浜踏まし）をする。近親者は同行して初三月節供を祝福する。

この行事は、新生児が海達者になり、海の恵みにあやかれるようにという祈願を込めている。海に糧を求める民の祈りである。

三月三日の節句は、略して「サンガチ」ということもある。浜下り（はまおり、浜くだりは誤り）と近年いわれるようになった。「近年」というのは、子ども頃きいた覚えがないからである。

三月三日は女の節供で、新生児が女兒の場合は特に力が入る。女性の災厄払い、産厄除法として行われる。必ずよもぎ餅を作って祝祭する。これはヨモギの薬効にあると思う。野良で怪我をして血が出るとヨモギの葉をもんでつけると治った。もう一つ、蛇の化身と娘の情交民話に由来する。

次は、町田原長著「与論島民話集」に掲載されているものです。

娘と蛇（マツタブ）

昔、娘と母と二人暮らしの家庭がありました。ある日、娘は街に買い物に行きました。途中で急に雨が降り、雨具を持たない娘は仕方なく道端の大きな木の下で雨隠れをしていました。

娘は雨隠れの瞬間眠気が続き、目が覚めたら雨も止んでいたので、
買い物をして家に帰りました。娘は日がたつにつれて、腹が太ってく
るので母が娘に尋ねてみたら、娘は男と遊んだことも恋をしたことも
ないと堅く答えました。

ある日、母が道端の大木の側を通りかかった際、蛇仲間の集まりの
話の中で自慢話が出ました。私は人間の美女に妊娠させたと、威張っ
て一人の蛇が話していました。聞いていた仲間の一人が威張るな、そ
の美女は蓬を茹でた汁で体を流せばお前の子は、死んで出るのだと蛇
の一人が話していました。

ところで、道を歩いていた娘の母が聞いて、私の娘は蛇の子を懐妊
しているかもしれないと思いました。母は大変喜んで、急ぎ足で家に
帰り蓬汁の風呂水を浴びさせたところ、蛇の子が沢山死んで出てきま
した。

蛇の子が死んで生まれた日は、旧暦の三月三日であつたので、三月
三日を女の節供として蓬の餅を拵えて食べさせるようになった。

蛇の形は、男根に似ている。頭が男根の頭、胴体がさおと見る。このことから娘と蛇との情交民話が生まれたという説がある。いわれてみるとなるほどだが、だとするとこの話を最初に始めた人はよほどのサジムトウ、コウギヤ（スケベ）だったに違いない。夢想世界のエログロ（好色と怪奇）的な話である。

蛇の妖術で女は眠気を催し、夢うつつの中で子をはらんだり、美男に化身した蛇と情交したりという民話は、形は多少変わるものの各地にあるということは、深層心理におけるエロチズムの現れであろう。（声には出さないまでも、蛇になつてみたいという男いませんか、このド・スケベめ）

三月三日・浜下りは、女の災厄を下ろす、海の水に流す、ヨモギの薬効で体の中を清める、そんな祈りが漂う。

平成十九年四月記

ハミゴウ遊び

シルバーエイジ（白髪世代・昭和初期以前生まれ）の方々には経験がある「ハミゴウ遊び」。旧暦の正月五、六、七日の三日間、島中から最も着飾り、めかした若い男女が集まり、三味線、太鼓、踊りに興じた。この日のために着物や洋服をこしらえ、待ちに待った一大フェスティバルである。酒肴を持ち寄り、歌い舞い、人生を語らい、愛を芽吹かせる三日であった。

ハミゴウ（神塚）は、島の東南部の海岸にある、切り立った岩の中腹にできている洞窟である。中は数名が三味線、太鼓で遊べる。その上方の草原など一帯をハミゴウと呼んでいる。このハミゴウ遊びが天之岩戸神楽にちなんだものだと思うと、神代の歴史に誘い込まれる。

天の岩屋戸

須佐之男命の悪逆非道に天照大神はおそれかしこんで、天の岩屋戸

に籠もつた。これで国中が暗くなり夜ばかりが続いた。ここに万の災禍が起こつた。八百万の神々が天の安河原に集まつて、高御産巢日神の子、思金神に思案させた。

長鳴鳥を集めて鳴かせた。伊斯許理度賣命（いしこりのみこと）に鏡を作らせた。玉祖の命に八尺の勾玉を作らせた。天兒屋命（あめのこやねのみこと）と布刀玉命（ふとたまのみこと）にはお供え物とさかき作らせて、布刀玉命に供えさせ、天兒屋命に祝詞を奏上させた。天手力男神を戸の脇に隠れ立たせた。天宇受賣命（あめのうずめのみこと）、さがりごけをたすきにかけて、まさきの葛をかつらにして、小竹葉（ささば）を持ち、伏せた桶の上に立って踏み轟かせ、神懸かりして、胸乳を出し、腰ひもを解き押し下げて陰部を丸出しにして乱舞した。高天原がどよめき、八百万の神共に笑つた。

天照大神は不思議に思つて天の岩屋戸を細めに開けて、「吾が籠もつたために、天の原自ら暗く、また葦原の中国（なかつくに）にもみんな暗いはずなのに、何故に、天宇受賣命は歌い踊り、八百万の神々がみんな笑うのか」といった。天宇受賣命が「あなた様より貴い神がい

ます。それで喜び笑い遊んでいる」と答えた。こういう間に、天兒屋命と布刀玉命が鏡を差し出して、天照大神に見せると、益々不思議に思い、やや戸より出た。このとき隠れていた天手力男神がその御手を取り、引き出した。同時に布刀玉命がしめ縄を入り口に張り「これより中には入れません」といった。高天原も葦原の中国も、自ら照り輝いた。八百万の神が協議して、須佐之男命の罪穢れを払い、鬚を切り、手足の爪を抜かして追い払った。

ハミゴウを天の岩戸に見立て神樂遊びとしたことを思うと、神代の神話を与論の地で舞う、なんと申しましようか先人の発想、英知の豊かさに脱帽し、ホーラシヤくなる。

悠遠の神話によるハミゴウ遊び、途絶えてしまったことを惜しみ、懐かしむ声があるのも、むべなるかなである。誰か酔狂仁がハミゴウライブをして観光客を呼び込んでくれないだろうか。

平成十九年四月記

グージャー（鯨）

外海の深さ六・七メートルほどの砂地の上に、体長二坪ほどの眠り鮫が五匹眠っているのを見たことがある。かねて話に聞いたことがあったのでそれだと思った。五匹とも岩穴の方に向けていて、身じろぎひとつしないで眠っていた。しばらく眺めていた。ロープで尻尾をくくり、捕獲したという人の話を思い出していた。ナガヲウイ（柄の長いもり）で頭を突いてみようとも思ったが、かなう相手ではないし、反撃されたらと怖くなり立ち（泳ぎ）去った。

プカ（鮫）はおいしい。熱湯を通して鮫肌のざらざらを落として酢みそ、刺身で食べると淡泊でいくらでも食える。骨は軟骨なので骨ひれまでこりこりおいしい。これユクプカではありませんぞ。

与論で家を新築増改築したら、神官かヤブまたは大工の棟梁に、材木に付いてきた山の神の送り、火事払い、病氣・チカイグトウなどを厄払い祈願してもらう。三献とお酒と塩を供え、祝詞奏上をして祓い清める。その後ミシヤフ儀礼をして新築祝いにはいる。ミシヤフは、

白米の粉を水に溶かして牛乳のようにしたものである。ミシヤフとは、三十三万三千石を一つにつきあわせる意味だと山下喜久博氏に教えてもらった。後年、これの代わりにお粥の上汁を使うようになった。米には悪霊を祓い清める霊力がこめられていると言われている。新築祝いの前に、成年二人が茶碗にお粥（かゆ）の上汁を入れて持ち、家の四隅の内と外で次の言葉を掛け合い、三度回る。

まず、表の隅で、外の者が粥を口に含み吹きかけてから、大きな声で「へーい」と呼びかけると、内の者が「へーい」と応える。以下は与論町誌1049頁に記載されているものである。

『外の者が、

此の殿内（地）の隅のシンジュマンジュケンジュと唱えると、

内の者が、

マンネーケンケー　鯨　鰐　鮫（グージャー、ワン、サマ）シンパタ

ナゲーリと応える。四隅で吸って吹きかけ唱えて三度回る。

この言葉の意味は、外の者が「此の家の隅に、住むすき間はないか」と問いかけたのに対し、「隅々まで、鯨や鰐や鮫がひっくりかえった

りして騒ぎ回っているもので、すき間はない」という意味だという。家の中に悪魔を入れない問答で、ここで悪魔というのは貧乏神ということである』

この短い儀礼の中に、いろいろな意味が込められていて、発想の豊かさを思う。ミシヤフを吹きかけるのは、米の靈威を使い、悪靈を吹き払うのであるが、吹きかけるさまは鯨の潮吹きを思わせる。シンパタナゲリーは鯨のブリーチングを言い表したものだろうか。鯨は地球最大の動物で、外の貧乏神を撃退し、豊かさをイメージさせる。鯨の骨は魔除けに使われる。新築したこの家は、地上最大のグージャヤがはねてもびくともしない頑丈で大きく豊かであることの宣言である。

昔の人は、魔除け呪術として行われる二人の青年のユーモラスなしぐさを神靈魂に対する敬虔心の中にちよつぴりの遊び心で楽しんでいたであろう。古人の心豊かさである。

トウラが子供の頃、これを真似て、「シンジュ、マンジュ、ケンジュ」、「マンネーキンネー、グージャヤワンサマ、シンパタナゲリー」と言つて遊んだのを覚えている。町誌に記述されている「マンネーケンケ

」が「マンネーキンネー」と転訛している。

「シンジュマンジュケンジュ」を「千寿、万寿、京寿」だという異説（少数派）がある。これに由来したものでどうか、「千寿、万寿、献寿」を毎年の年賀状の寿詞にしている人がいる。「シンジュ マンジュ ケンジュ」を祝い言葉として「千寿、万寿、献寿」を当て、「マンネーキンネー」を「全く同じです」とし、「グージャーワンサマ シンパタナゲリー」を「鯨、鰐、鮫が上を下への大騒ぎ」とすると、新築祝いにふさわしく、外から「ヘーイ、千寿、万寿、献寿」と呼びかけ、内から「全く同じ。みんなグージャーになってワンドウソーロー 大騒ぎ」と解釈すると、喜びの爆発となる。このしぐさ、狂言劇風でユーモラスである。与論十五夜踊りの「ピートウヌカースー」を思い出させる。

サティム サティサティ。この短い呪術、人によつて文言や意味解釈が違う。外の悪魔は、貧乏神とする説（町誌）、火事を起こす火玉とする説、病魔も含めた邪悪な魔物説等がある。「シンジュマンジュケンジュ」を「この家の隅に、住むすき間はないか」という問いかけだとする説（与論町誌）、「住むところ、間、気」はないかという問いかけ

だとする説、新築祝いの言葉だから「千寿、万寿、献寿」とする説、等がある。「グージャー、ワンサマ」を「鯨、鰐、鮫」とする説、「鯨」だけ説、等がある。さらには「シンパタナゲリー」を上を下への大騒ぎ」とする説、「シンパタナゲリー」ではなくて、「シンパンゲリー」で「大きくていっぱいにはまっている意味」だとする説、等ある。お釈迦様の教えがいろいろと解釈され、分かれていったごとくである。ともあれ、古人のこの習俗を復活させて、せかせかした今の世に心の潤いとゆとりを持たせたいものである。この風習を復活させると新築祝い、大いに盛り上がると思うが！！ いかがでつしやるか。

平成十九年五月記



ウンニーマイ（芋煉飯）

トウラの家の前に屋敷からハシギ水（排水）が流れ込むノースー（苗代田）があつた。その片隅に田芋を植えていた。茎は、皮をむき、湯がいて酢味噌にするとおいしい。田芋の葉に時々大きなオージャフ（蝶か蛾の幼虫）がいた。尻にはアンテナを一本ピンと立て、顔はいかつかく、足は吸盤状になつていて体は全身葉の緑色である。棒切れでつくると体をくねらせる。人の指大もある大きなもので気持ち悪かつた。それが美しい蝶に生まれ変わつて大空を飛び回るとは神業である。オージャフは生まれ変わつて蝶になることを知っているだろうか。否である。オージャフの死が蝶に生まれ変わるように、人間の死は四次元への生まれ変わりになるのではないか。分からないのは、オージャフが分からないのといっしょである。

米を作らなくなつて、そこには鯉を飼つた。結婚したら新妻が、「家の前に池を作つて」と一言もらした。なるほど、子供がそこに落ちたら一大事と、早速埋めて畑にした。今は草山になつてしまった。

それはさておき、小正月（一月十五日）には、ウンニーマイを作つて食べる。食べないとミヤンチツクー（ふくろう）になると言い伝えられてきている。芋には、パツタイムジ（里芋）と田芋がある。ウンニーマイは、その名前の通り、芋と米を煮て、練つて作る。粟やもち米を使つたりする。食べたくななくても、一口でも食べさせるために「ミヤンチツクーになる」と脅かす。どうしてそこまでする風習を作つたのだらうか。アダンの実や草木を菜食していた太古にあつて、とてもおいしく、しかも小芋をたくさんつけ、増やすことができる。革命的な新種の里芋がもたらされたときの喜びはいかばかりであつただらう。その喜びと神への感謝を捧げるために、小正月をウンニーマイ記念日にして、作つた。まず神前に供え、さらに分家は本家に、妻、母、祖母の実家の神前にも供えた。今でこそご馳走ではなくなつたが、飢えていたその昔はご馳走であつたし、神への感謝を忘れない敬虔さがあつた。

ミヤンチツクーとは、顔がミヤンカ（猫）の顔に似ているところからその名がついたのであらう。夜行性でホー　ホーと鳴く。鳴き声は

不吉の前兆として嫌がられる。夜行性だから陰気で邪鬼にさえみられてしまう。フクロウは「母喰鳥」とも書かれる。食べないとそんな鳥になるというのだからよっぽどのことである。ミヤンチツクーにとってはいい迷惑である。

里芋は、正月のおせち料理に欠かせないとしている。子持ち芋で子孫繁栄を寿ぐものである。大学時代に歌ったじゃれ歌に、「：父さんこの芋何の芋、坊やよく聴けこの芋は、坊や作った種芋だ」というのがあった。

マジで、ウンニーマイとミヤンチツクーの食文化、手抜きせず大切に継いでいきたいものである。



平成十九年三月記

アママン

トウラが子どもの頃、クサビ釣りの餌はアママンだった。石で殻を割って取り出し、プグイ（ふぐり。腹の部分）をちぎり、フブキ（藁やシユロの皮で作ったつと）に入れて持ち歩いた。釣れる魚は、サークサビ、キンクサビ、オープタマタ、サープタマタ、ニーバイ、プクルビ、イヒヨウ、ギニユルムツチー、スームチ、ダフミ、アママン（魚）、ワン、ナベーラ、イノーガマシ、ピューシ、サヨリ、ヌブス、アンモールなど多種にわたる。魚の好物である。そのためであるう、いざというときのために重い殻を引っ張って歩く。自分の体重の何倍もの殻を引きずって歩くとは哀れである。

アママンの親分みたいなアンマフ（ヤシガニ）がいる。これは素手で捕まえるにはいささか勇気がいる。頭胸部は発達して大きく、缺もでっかい。腹は小さく胸部にくっつくようにしている。ヤドカリと同じ種類だが殻は引きずっていない。強く敵に襲われる心配がないからフグリ丸出しで平気である。イキギリ（喘息）の薬と言われた。南洋の

島ではタンパク源にしているとか。

海にいるヤドカリの中には殻の上さらにイソギンチャクを乗せて歩いて「アブラアマン」といわれるのがある。ヤドカリにとつてはイソギンチャクを怖がつて敵が近づかない、つまり護衛として連れ歩く。イソギンチャクにとつては無銭旅行が出来る。共存共栄である。アマンの生き方もいろいろである。このアブラアマン、食べられる。

さわるとピュツと海水を吹っかけるイソギンチャクがいる。これを与論語でシーバイシツチャブイヤ（小便をしっかぶるもの）という。先の平たい鉄のへらで、引つ込まないうちにさつとえぐり取つて雑炊にして食べる。同じイソギンチャクの仲間であるイヌビを採つてきて、祖母がピヤンドウーシー（大麦雑炊）をして食べさせてくれたことを覚えてゐる。独特な味がした。しかし、その気で探さないからか、近年見かけない。

「ユンヌヌパジマイヤ アマンからテウーサ（与論の始まりはアマンからだそうだ）」という昔物語を読んで、思わず「ウソー」と言いそうになつた。それは認識不足で、このアマンはヤドカリのアマンのこと

ではない。

アマは、辞典に海、海女、海人と出ている。物語り中のアマンは、アマビト（海人）を言ったのである。赤崎の小字名に、アマンジョウがある。またアマンジョウゴウという神井戸がある。ここで言うアマンは「海人」のことではないかと思われる。この地域は与論に最初に上陸した人々が住み始めたところだといわれる。その近くのウワイグスク（上城）遺跡は発掘調査によって住居跡だったことがかなりな部分明らかになっている。

「アマンジョウ」のアマンとは、アマン自身が言ったのか、それよりも先に住んでいた人が言ったのか。

「与論の始まりはアマンから」という昔物語りの「アマン」をヤドカリの与論語名アマンと勘違いするような脳タリントウラの連想である。お笑いあれ！

平成十八年九月記

あやかる

正月に鏡餅を神床に供える。なぜ餅を丸く鏡のようにするのかというのと、鏡は古来、呪術的なものとして重視され、祭器や権威の象徴・財宝とされたからである。

三方の上にウラジロを敷き餅を二つ重ね、その上にダイダイを載せ、さらに末広がり飾る。ウラジロは与論では見かけなくなつたが、シダ植物の一種で、表は緑色だが裏は白い。腹の中は白くてきれいなことを意味する。餅は白く、丸い。純白で円満を意味する。それを重ねるのは重ね重ねて続くようにということである。ダイダイはみかんの一種で橙色をしている。ダイダイ代々。ダイダイは与論にはないの。で橙色の島みかんを代用させる。末広がりには、子々孫々へ末広がりでありますように。

餅は米文化・日本の祝祭事によくつかわれる。トウラが子どもの頃は、各家庭で二人向き合つて交互に、ぺったんこぺったんこと呼吸を合わせてついた。合間に姉か母が水で手をぬらし餅をひっくり返して

均等につかせる。餅はもとをただせば一粒一粒の米、それを蒸して柔らかくしてつきつぶす。つき合わされ、こねられて間にあつた空気、わだかまりをつきだし、一つに結び合う。丸く丸めて神様にお供えし、分け合つて食べる。家族が一年の終わりに気もち一つにしてまた新しい年を迎える。餅ハ持ち。力持ち、金持ち、命長持ち。いろんなことがこめられていている餅、元日の吸い物でいただく。正月の心文化・心象風景である。

餅は白くてすべすべするところからもち肌ともてはやす。餅は保存可能の発明品で、遠出の携行食品にもなった。煮ても焼いてもすぐ食える。米の生氣は強く、塩とともに災厄払いに用いられる。米や塩は、食生活に欠かせないものでもある。

吸い物にエビや昆布を入れる。エビは腰が曲がるまで長寿でありますようにとということと常に脱皮して若返る。昆布は、「よろこんぶ」と「子生婦（こんぶ）」の字を当て、子宝に恵まれ、子孫繁栄を願う意味がある。数の子は、たくさんの子宝に恵まれ、卵の数ほどの幸せにあやかる。しかし、品薄で黄色いダイヤになってしまった。

一対の神酒と塩を載つけたピムン（干物）を配る。干物は今日の寿ぎがそのままの状態で続く願望である。スルメがよく使われるのは「寿留女」と当てられるからである。

元日の朝早起きすると一年中早起きになり、朝寝坊すると一年中朝寝坊になると言われ早起きさせられた昔日がある。まだ明けやらぬ浜に行き、足跡の付いていない砂をとって来て庭にまく。井戸から若水を汲んできて年神様に捧げる。今じゃ「若水」は井戸に埋まってしまった。門松には割れ木を組んだり、立てたりするとところも見かけなくなった。プロパンガスに取って代わられたからだろうか。豚肉、豆腐などご馳走にあやかる楽しみも薄れてきた。

トウラは七十路に入った。年は十分取ったのもういらなと言いたい。「明けましておめでとうございます」は新年の挨拶言葉だが、心の中は「明けまして悲しく残念でございます」の心境である。

正月や冥土の旅の一里塚、めでたくもあり、めでたくもなし（一休）

平成十九年正月記

イイジマハンドウーグワア

子どもの頃、沖繩から来る旅芝居を祖母に手を引かれて見に行つた記憶がある。那間の夜学（公民館を当時夜学と云つた）で公演があつた。木戸銭を払つて入る。演目に「イイジマハンドウーグワア」という実話にもとづいた恐ろしい悲恋物語があつた。次はその概要である。

伊江島の島村屋の伊江親方色館の息子にカナヒートという若者がいた。あるとき、カナヒートは綿の買い付けのために辺土名へ渡つた。辺土名滞在中にカナヒートは美女ハンドウーグワアを見染め恋仲となつた。二人は若い血を燃やして青春のロマンにふけた。

だが、カナヒートは伊江島に妻子があり、ままならぬ身の上。伊江島ではカナヒートの帰りが長引いていると身内の者は心配し、まもなくカナヒートは叔父によつて島に連れ戻された。最愛のカナヒートとの仲を裂かれたハンドウーグワアはつのる思慕の情に身を焼き、悶々の日々を過ごしていた。が、ついに思いあまつて、カナヒートの真情を確かめようと伊江島へ渡る決心をした。こうしたハンドウーグワアの一途な気

持ちちに同情した伊江島のシンドウスー（船頭主）は彼女を島まで連れ帰り、親切に面倒をみてやった。

島に渡ったハンドウーグワアは愛するカナヒーとの再会に胸躍らせながら島村屋を訪ねた。ところがカナヒーの態度は冷たかった。あまりのひどい仕打ちにハンドウーグワアは失望して、島村屋の向いの松林へ入り、自らの黒髪を首に巻き付けて若き命を捨てた。

ハンドウーグワアの亡霊が島村屋を襲うようになった。夜な夜な島村屋の家族を苦しめ、悩ました。食事をしていると、お膳が宙に浮いた。家畜も死んだ。数々の不吉な出来事のうちに島村屋の子孫は絶え果てた。反対に船頭主の子孫は代々栄えた。（沖繩村の伝説、青山洋二著、那覇出版社）全てヤンバル語で演じていたが聴衆はよく分かっている、泣き笑いしていた。

当時青年団活動が盛んで演芸会も華やかなものだった。今でも印象深く残っているのは、山下金幸大兄の聴衆をわかせる数々の芸。なかでも浪花節はプロはだしだった。また、山本富士雄大兄のアコーデオ

ンは物珍しさも加わり、その情景は今も脳裏に焼き付いている。
川口村信氏は島内を公演して回っていた。集落ごとの人情や特徴を
歌にし、振り付けて踊っていた。節々の最後は、「あっ、しゅっちゅい、
しゅっちゅいな」で終わる。ユーモアたっぷりで聴衆を魅了した。

松村富子さんは名うての琉球舞踊の踊り子だった。

田畑吉之助先生は三味線の名手だった。私の父と同級生で親交もあ
った。あるとき家で祝宴があつた。吉之助先生の長男達兄が三味線を
弾いて歌い、みんなを踊らせた。歌の節の末尾は「ハイヨーセンセイ
又 チュラリトウナー」だったことを今も覚えている。達兄の長男が
かりゆしバンドを主宰している哲彦氏である。音楽は血を引くといわ
れるが、合点である。

今はテレビや生で質量ともにトゥラの子供の頃の何倍ものを見、聞
きするが、感動は子供の頃ほどではない。感動も老化するのだろうか。
シタリガセンスル ヤーセンスル

平成十八年九月記

カルパトウ

ガードレールに黄金色に実った稲が掛けられている。トウラ（私の幼名）が子どもの頃はアブシ（畦）に穂を下向きに干し、干しきれないのは、田んぼに広げて干した。

刈った稲穂にカルパトウ（鳩）が群がった。竹のバネを利用したパンチキヤマ（罨）を仕掛けた。横たえてある細い竹の棒を鳩が踏むと鍵がはずれて、弓なりになっていた竹がぱちつと跳ね上がり鳩の足をくくるようになっていく。ぱちつと跳ねるところからパンチキヤマと呼ばれたのである。鳩がかかるとそれは大喜びである。羽をむしつて藁に火を付け、産毛を焼いて解体する。鳩汁にしてご馳走である。貴重なタンパク源であると同時においしいので、子どもが遊び半分で仕掛けるばかりではなく、大人もやる人がいた。

その後空気銃で撃つ人がいた。空気銃では雀も撃っていた。当時雀は大群をなしていた。

正志兄（ヤカ）が若い頃散弾銃を持っていた。幸名波に広い田圃を

持ち、稲をでかしていた。そこに鳩撃ちに連れて行つてくれた。最初は正志兄が撃ち、二度目に私に撃たせてくれた。一瞬四方に玉が飛ぶ散弾銃なので、群れをめがけて撃てば当たる。急所に当たったものとはとれるが、はずれたものは負傷しながらも逃げていく。中には片方の羽が途中から折れて垂れ下がっていても必死に逃げていくのもいた。田圃一面に鳩はいても一度撃つと一斉に逃げていく。そのため正志兄は一度自分で撃ち、獲物を確保してから次に付録として私に撃たせてくれた。生涯たった一度の体験であつた。

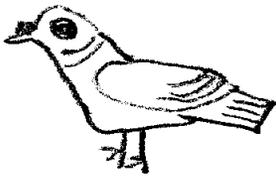
早速解体料理である。正志兄自慢のタレに浸けて炭火で焼いた。その焼き鳩のおいしかつたこと。それまでに食べたご馳走の中で一番うまかつたことを今も鮮やかに覚えてゐる。稲穂に群がる鳩を見ると今も思い出されてならない。

その昔、じいさんとばあさんが野良仕事をしていた。じいさんが石を投げて運良く鳩を撃ち落とした。ばあさんが持ち帰り料理した。味見をした。おいしかつた。もう一切れ食べた。コレダタイ（食べたさが増すこと）して、とうとうみんな食べてしまった。さして、じいさ

んの分がない。ばあさんは困った挙げ句、自分のあそこの片方を切つて鳩汁に入れた。じいさんは、「シーバイ　クサソウアシガ　マサイドウ（シヨンベン臭いけどおいしい）」と言つて食べたそうだ。

鳩のうまさを称えて作り上げた先人のユーモア話である。鳩のうまさを知つたトウラは、さもありません。パトウヌシームヌ（鳩の吸い物）といえ、うまさで右に出るものがない例えに使われていた。鳩は夫婦仲が良く、一生添い遂げるそうである。

シトウトウー　クイトウー　シトウトウー　クイトウー　と優しく番（つがい）は愛の歌を歌う。



平成十八年七月記

ヤンバル

昭和五十年代前後、与論観光が盛んな頃、正志ヤカは、高速観光船を持ち、ヤンバル（沖繩北部の総称）との観光事業をしていた。

与論中学校の職員が、その船を貸し切って、沖繩旅行をした。校長教頭が行かなかつたので、トウラ（私の幼名）が旅行団長にされた。あいにくと海はしけていた。北東の風、横殴りの雨も混ざった。船は口ーリングにピッチング、揺れに揺れた。先生方は船室にうづくまり、おびえ、口を開く者などいなかった。トウラは操舵室に行き船長と並んで前を見ていた。雨に混ざって大きな波しぶきがフロントガラスをたたきつけた。その激しさにトウラも死の恐怖を覚えた。船長におもわず「大丈夫ですか」と言いそうになった。言ってもどうしようもない。私は団長である。団長がふるえてどうするかと平静を装った。辺戸岬沖にさしかかったら潮流が激しかった。渦を巻き船は横に流された。船は岬を大きく回り、やっと国頭の山陰に入った。船長も一息ついたのである。辺戸岬沖はかねてから難所だと言った。トウラは生

き返った思いをした。

オウム真理教のドン麻原彰晃を警察が捜索中だった。与論にもその信者が土地や建物を持っていてと噂に聞いた。麻原彰晃が沖繩に逃亡するのではないかと、与論島及び近海は警戒地域だった。巡視艇が二隻、与論の沖を警戒巡視していた。

正志兄の漁船で、二人は沖繩の辺土名に行った。与論から十kmほど沖に行つたところで、巡視艇がさあーと近づいてきた。さすがに怖かった。「何も悪いことはしていないのだから」と心の中でささやきながら突つ立っていた。正志兄はエンジンをスローにしたが進路は変えなかつた。停止命令が来て、横付けにされ、取り調べられるかと思つた。百円程のところまで止まつた。何事もなかつた。相手は双眼鏡で船籍を見てコンピュータでデータを調べたのである。正志兄は再びエンジンを勢いよく吹かした。麻原彰晃は、与論島沖さえ波立たせたものである。

正志兄は、辺土名の町に商取引仲間も多くいて昵懇（じつこん）にしていた。沖繩話がべらべらで、不自由なく方言で話していた。正志

兄の羽振りの良さを改めてかいま見た思いがした。

大田英勝氏を中心とした朝戸グループが、ヤンバル駅伝にオープン参加して交流を深めていた。ヤンバル駅伝は、国頭郡の各町村と名護市が、伊江島、伊是名島、伊平屋島の三島で順繰りに行われる大会である。それに今では与論島が加わり、四島順繰りである。伊平屋島であつたときに正志兄（当時体協長）を団長とした与論チームは漁船を貸し切つて直接伊平屋島に渡つた。台風が近づいて海は荒れ、女子選手の中には船酔いで吐く者もいた。明日の試合は大丈夫だろうかと心配した。港では関係者が出迎えてくれた。当日は沿道に「与論チーム歓迎」の横断幕が掲げられ、声援を浴びた。見ず知らずのよそ島なのにと感激した。夜は山羊汁、豚汁、魚汁を全員に振る舞う歓迎会があつた。

ヤンバルは不思議な国である。不慣れた離島をわざわざ会場にして大会を持つ。今では与論を開催地にしてきている。ヤンバルの思いやり、国柄に感服する。ヤンバルとの交流花盛りにしたものである。

平成十八年八月盛夏記

ヤギ

ミシヌパンタニ ヤギガタツチュテイ クチヤムガムガ パナヤク
ンクン マイカラマミダニ サラサラウトウチュテイ チエチエチエ
ー。与論民謡の一節である。山羊糞の豆種はきれいな円形で、思わず
見とれる芸術品である。

母の母が、プチ（よもぎ）を入れてヤギ汁を炊いてくれた。プチを
入れるのは匂いを消すためであった。

母は、ヤギの匂いが極端に嫌いだった。お蔭で家族はヤギ汁にあず
かることがなかった。そのため、自分の女の子に、好き嫌いがあつて
はならない。母の好き嫌いは家族に被害が及ぶからと、訓戒した。母
の母は、孫に食べさせたいがためにプチを入れたのである。お蔭でト
ウラはヤギ好きである。

トウラのヤギ好きを知っていて、ヤギをつぶすときは、連絡があり、
注文をしたりする。大きな鍋で煮て、翌朝浮いている脂を取り除く。
脂は取ることもつたいない、味が落ちるから取らない方がいいという人

もいるが、トウラのおなかは脂肪だらけのワタブタである。平成十八年の流行語ベストテンにメタポリックシンドローム（内臓脂肪症候群）がある。トウラは名誉ある自分の腹をなでる。大根、椎茸、味噌を入れて煮込む。湯気とともに匂いたつものに舌鼓をうつ。知人・友人を呼んだりする。こんなおいしいご馳走を食べない人は、人生の楽しみを一つなくしているとかわいそうに思う。

あるとき私がヤギを炊いた鍋に、母が塩水を入れニンニクをつけた。二日後にニンニクは全部腐っていた。母が、「この鍋にヤギを炊いたか」と語気を荒げて怒った。鍋はきれいに洗ったつもりだったが、それにしてもヤギがニンニクを腐らせるほど強いとは初めて知った。

「ヤギ薬」といわれる。食べると体が温まり、額から汗が出る。精力がつくこと間違いなし。ヤギの一番おいしいところは一割丸とか。ありついでみたいものだが、まゆつばにおもえる。ヤギを食べたあとは水を飲んではいけなないと教えられた。理由は冷やされて腹の中で脂が固まってしまふからとか、ヤギは水を飲まないからとか。

トウラの勤めた郡内のある島では山に放し飼いをしている、集落の

誰でも取つていいという。しかし人が近づけない断崖絶壁にいる。舟で海から近づき射落とすという。途中に引つかかかったものは取らずじまいである。その島で、山羊汁にプチを入れる話をしたら、何を勘違いしたのか、その島ではしたことのないプチを入れて炊き、私を呼んでくれた。後日、その山羊汁は自分たちには食べられなくて鍋ごと捨てたと、大変な恨みごとをいわれた。そこでは、殺す前には匂いを増させるためにトベラを食べさせるといふ。ヤギは山羊匂いがしないとおいしくない。ヤギ匂いは、臭いという人、香ばしいという人様々である。輸入ヤギはあまり匂いが無い、冷凍で消えたのか、元々匂いの薄いヤギなのか。品種改良して匂いを薄くしたのか。

トウラはなーんたつて、島山羊が好きである。

香り立つ湯気とともに
口やムガムガ
鼻やクンクン

平成十八年十二月記

グー・具

与論語で友達のことを「ドウシ」又は「アグ」という。アグは、「合
う具」の「う」が脱落してアグになったと思われる。

グー＝具。

料理では、みそ汁や雑炊に入れる野菜・魚肉のことを具と言う。豆
腐にイウガマをのつけると酒の肴にもってこいである。下駄や草履の
ように対をなすもの、蛤やアナグーの二枚貝、セットや組み合わせに
なっているものなどをグーといい、片割れをハタグーという。グーに
は「良くあう」意味が含まれている。

シヤコ貝のことを与論語でアナグーという。アナグーとは穴によく
合うということである。穴に合うというより、実際は自分で大きさに
合わせて穴を作っているのである。

「グーナテイ」、「グーナユン」と言えば「夫婦になる」ことを意味す
る。最も現代では通用しないかもしれないけれど。年頃の成年に「ア
グ、トウメーテイクー」といえば、結婚相手を捜してこいという意味

である。古代語が今も残る与論語である。

グールになつて談合事件を起こすといふときのグは悪い意味に遣われたグである。

道具とはその道に合う具である。大工道具。工具。農具。漁具。文具。人間が文明を作り上げてきたものがこの具である。以前の家造りは、大工が墨で印を付け、ほぞを作り、のみでほぞ穴をほつた。少数の大工に数名の加勢人を雇つていた。トウラは加勢の経験があるが、一発で合うように深さ大きさをほるのはむずかしく、慣れないトウラははめてみて修正を加えるのが常だつた。コーギヤールウジャターは、相棒を探すのに「ポールヤイダガ、プトウヤイダガ」などと言つていた。（この方言、分からない人は分かるうとしない方がいい、説明する人が困るから）。

大工の棟梁が持つている大工道具はいつもぴかぴかである。名人と言われる人ほど上等な道具を持つてゐる。その人達は、人に自分の道具を貸したがるないと聞いていたので、貸してくださいと言いくかつた。特に番匠がね。刃物ならいざ知らず、番匠がねはどうして？と

聞いてみた。「棟梁は番匠がねが命、わずかな狂いがあつてもならない」との答えだつた。納得である。正月二日に行われる「デーク祭り（祝い）に番匠がねと墨壺を供えるのはその表れであらう。弘法は筆を選ばずとは嘘である。名人、達人ほど道具を選ぶ。

棟梁が大工の賃金を決めていた時代、その道具を見て決めていたそうである。腕がたつほど道具もたつというわけである。また、仕事が出来る人は、事前に道具を整備し、そなえている。「具」の解字は、鼎を両手で捧げるさまで、物を煮る器の鼎をそえる意である。そなえる、そなわるになる。仕事は段取り半分である。

沖平安富、富山為村、山下福治、町永為、遠山先峯、沖莊悦、柳田重秀、吉田重直、市吉治、高田納徳の各氏は名棟梁と尊崇された。

サティム皆さん、グーの一番は夫婦であると思われるが、ご異存はござるまい。シニョータルムヌガ、ヤンウレーター！

平成十八年十二月記

貝

貝を総称して与論語で、「キンニヤ」という。ピシグン（潮干狩り）でとれる主な貝は次のようなものである。

ウマシビ、シビ、イシユパン、ミイシツポータ、ガギモー、チヌモ
ー、ハタキニヤ、テイララ、ギニユルガイ、ブラ、ギシクン、アナ
グー、マガイ、オービ、チンチブトウ、タカチビ、イブ、ハタキニヤ
貝の字は、たからがいの形「貝」をかたどっている。古代、特に中
国では貝を宝とし、貨幣がわりとして用いた。貨幣に関し、貝のつく
漢字の主なものは次の通りである。

財、貨、貢、貫、責、貪、販、貧、賀、貴、賞、貸、貯、買、費、
貿、資、賃、賄、賂、贄、資、質、賞、賤、賠償、賚、賣、賢、賭、頼、
購、贈、鬻、贖。

出産は、女の一代・一大事業である。その昔は自然分娩だった。難産もあつた。ウマシビは、子安貝といわれ安産の守り貝である。出産のとき腹に力を入れて息む時、手にウマシビを握らせるまじないがあ

った。ウマシビの形は妊婦腹に似て、「ウマラス」と連動感がある。

なぜ寶貝なのかというと、女性の性器に似ているからなのである。そこから子どもが生まれてくる。これほどの宝はない。そのため貝が宝の象徴となり、貨幣がわりになった。ドウダンミン男の推論にしてはできすぎだと思うが、権威ある学説をご教示願いたい。与論語で女性のあちらは、「ポウ」という。宝の音読みは「ホウ」である。ここでも通じている。(チ、コンコン、ウカミヌポー、ハミテイヲウガミヤビラン)

貝は、人間の重要なタンパク源だった。古代人の貝殻の捨て場が貝塚である。貝殻は古代から現代まで広く生活に重用されてきた。子ども頃ガギモーをひもでくり、引っ張って遊んだ。シビは、パンチキゴ(はじき飛ばし・ゲートボールの原型)をした。クルシビは背中をとり、ひもを通して連ね漁網の足重りにしていた。飾り物やアクセサリー、装飾細工素材として活用されている。夜光貝などの神秘的とも言える光沢は、昔から螺鈿細工に使われている。

ガギモーやチヌモーをピジャイジナ(左縄)にくくりつけ、牛や豚

などの畜舎の入り口につるした。これは家畜がプーキ（疫病）にかからないための魔除けまじないである。

子孫や親族など血筋が途絶えた天涯孤独な者をイキーギリムヌといつた。その人が死ぬと供養してくれる者がいないために、供物欲しさ、隣近所をミシタ（物乞い）して廻る霊になるという。この霊は飢えのあまり豚小屋のエサでさえ横取りして食べる。そのためこのイキーギリムヌが立ち寄りそうなどころにはガギモーなどをつり下げしておく。アワリナグリヤー イキーギリムヌ どこへ行けばいいだろう。

沖繩の「おもろそうし」には、与論島の名前は「かいふた」と読まれている。田村博士は東洋に浮かぶ一個の真珠と称えた。平成十八年の鹿児島県一の長寿者は男女とも与論の野沢マゴさんと嶺島峰永氏でいきがい（貝）の島である。ご賛同いただけましたら、ぱちぱちぱち。

平成十八年十二月記

魂

与論島は「魂の島」だと古川医師は歌っている。

その家の主婦（または主人）は、朝起きるとまず最初に神棚に線香を立て、茶湯（茶のお初）を供え、拝む。人から物をいただくも「何某からいただきました」と言つて神前に供える。いつでもまず神様からであるし、いつでもそこにいらつしやる感覚である。また、表座敷に上がる来訪者は、まず最初にその先祖に礼拝をしている。人は死んでも、魂は不滅であると思われている。魂の存在を信じているというより、潜在意識まで高められていて、日常的にその所作が見られるから「魂の住む島」と感じられたのであろう。表紙の与論島の中に「魂」を入れたのはその意味である。

祭祀儀礼で「玉串奉奠」がある。玉串とはみずからの魂を串に刺し止めたものである。玉串奉奠は魂（清き真心）を神に捧げる行為である。玉串に使われる榊は与論にはないので、ガジュマルで代用させて

いる。紙垂（しで）は参拝者の魂が依りつく衣服のような意味をもつ。

十日祭、三十日祭などの最後に、台の上には供えたご馳走などを下げ、大きなコップを一つ神棚側に置き、手前に小さなコップを数個並べる。最初に、祭主が小さなコップにお酒を注ぎ、向こう側の大きなコップに半分以上注ぎ、残りを自分でいただいで二礼二拍の礼拝をする。同じ所作を子や孫、近親者が行い、あとの参列者は代表者といつしよに礼拝する。その後、祭主は縁側の外に出る。内側の誰かが神棚の榊と線香を祭主に渡す。祭主が持っている榊に「ウワーリヨウ」と言いながら、水の初やお酒を注ぐ。祭主は、門まで送るときと、墓まで送るときがある。これは統一したやり方があるのではなくて、各戸（祭主）によつて異なるようである。

また、神様は、神棚に鎮座しているのだから、送り出すのはおかしいとして、これを行わない人もある。そういわれればもつともである。しからば、神様は墓におわすのか、家の中の神棚におわすのかということになる。普段は墓にいて、祭の時には来ると説く人がいる。お盆

のときには迎えて、三日目には送っている。

神棚にウヤイヤープジのご神体として祭つてある「玉」は、「魂、靈」と同じ「たま」と発音されるからそれを象徴させたのであろう。また、玉は心臓をかたどつたとも言われるし、天照大神が「太陽神」だからだとも言われる。神様は目には見えない。居所が墓であるとか、神棚であるとかを超越したところにある。言うなれば私たちの心の中にある。神も仏も、この世のすべてがそれぞれの中の心の中にある。

いにしえの偉い哲人は、「われ思うゆえに、われあり」と言った。自分自身でさえ、自分が思っているから、自分があるというのである。偉いこつちやデー！

与論島はウヤイヤープジの「魂」を大事にする「魂の島」であり続けてもらいたい。イチガイチマデム、島が続く限り！

平成十八年十二月記

パラヂ (親戚)

トウラが、親族のある葬式で、進行係を務めたら、「あなたはあそことどんなパラヂか」ときかれた。はね上がり者のトウラは、とんでもないところへきて進行係をしている、と思われたのかといぶかりながら、血筋を説明した。昔は親族に不幸や不慮の災害があると、親族が寄り集まって、労働力や物心両面の相互扶助態勢でことにあたっていた。現在は「金で買えない物はない」といわれるほど、金さえあればなんでも調達できるために、物を持ち寄ることはなくなった。葬送の儀における労働力の相互扶助は、今もその慣わしはほとんど変わっていない。そのため、親族以外がそこで何らかの役目をしていると、どんなパラヂだろうということになる。

与論で葬式に参列すると、その親戚関係がわかる。席順は血縁が故人に近い順であるし、玉串もその順番である。そのため、六十歳以上で与論に住み続けている人は、たいていその関係を知っている。

親族のことを与論語で、パラヂという。親族には姻族を含める場合

と含めない場合がある。チュパラ（一腹）は一つの腹から生まれた血のつながった、縦の親族をいい、姻族は含まれない。パラヂは姻族も含める。〇〇家のパラヂといえ、妻側のパラヂと、夫側のパラヂを合わせたものをいう。

一般的に女側のパラヂと男側のパラヂでは、男側のパラヂが重んじられ、かねての付き合いも女側は薄くなりがちである。冒頭の「どんな関係だろう？」という疑問は、女側関係でおきがちである、というのは私の偏見と独断なのかもしれない。与論町誌1125頁に、「与論島は今でも母系的パラヂの意識が強く、父方の親族とよりも母方の親族の方に、親密感とパラヂ意識をより強く抱いている。」と記されている。また、パラヂの語源については、「腹氏（パラウデイ）に由来し、パラ（腹・胎）とウデイ（氏）が複合したパラウデイから、パラウヂへ変化し、さらにウが抜けてパラヂが生じたのである。」と記されている。

「始まる」の「始」の字を分解すると。「女」と「台（もとになるもの）」になる。パラヂは女が台で始まる。パラヂもパラ（腹）が上だから、

母系性社会が優勢なのかもしれない。

パラヂは、「海パラヂ」、「パルパラヂ」のように親しい関係を表わすことにも使われた。いつも共同・協力して漁獲をする仲間を「海パラヂ」といい、耕作地が隣どうしでお付き合ひのあるのを「パルパラヂ」といった。子供の頃テイラキ（寺崎）に家族で弁当持参の一日作業に行き、隣の人と一緒に弁当を開きおかずを分け合ったりした。

テイララキの土地境に大きなガジマルがある。その下は、寺崎シニグの祭場であった。その祭主は田畑利範氏で、私の祖父は血縁関係はなかったが、パルパラヂでそこに入っていたようである。田畑氏が満州開拓に引き揚げたために途絶えた。その後、その土地を取得した徳田中納氏が、牛が死ぬ祟りが出たということで、復活させてひとりで祭っている。

シニグは、パラヂの結束集団である。本来氏族の血縁のみを指し姻戚を含まなかったようである。八世代まで含む大きな集団もあったようである。

兄弟、子供など、肉親のほとんどは島外暮らしというのが、与論の現状である。トウラの男兄弟は五人だが、後の四人は島外暮らしである。肉親の不幸に寄り合い、久方ぶりに「ミチャルヤ、イキチュリボー、イチョウテイインミヤールユイ（懐かしい、生きていればこうして会うこともできるもんだ）」とパラチ同士血のぬくもりを感じ合う。離れ離れが進み、心の中も都市化が進みいく世の中、自分のへその緒のつながり、血のつながり、魂のよりどころ、パラチの絆、心かよわしていききたいものである。

平成十九年二月記

シニグ

シニグはパラジ（親族）集団で行われる。寺崎シニグの拝所は、私の土地と接する東隣の大きなガジマルの下である。祖父は、座元と血縁関係はなかったと思われるが、畑が接している関係でパルパラジとして加入させてもらっていたようである。往時のシニグパラジは五世代から八世代までも遡る大きな血族集団だった。全島各戸のほとんどがどこかのシニグに属していたと思われる。

寺崎シニグの座元は、土地の所有者である田畑利範氏だったが、昭和十六年に満州開拓に引き揚げて、途絶えてしまった。そのシニグ土地を徳田中納氏が買い受けて耕作していたが、ある年、牛が立て続けて悶死した。変だと思つた中納氏がヤブ（占い師）に占つてもらつたら「シニグ神を拝みなさい」とのお告げだった。祟りは最初家畜（四つ足）に祟り、何もしないでいると次には家族に祟つてくると、かねて聞いていたので、シニグ祭りを始めることにしたということである。シニグの祭り方について引継ぎは受けていなかった。同じパルシニグ

である隣の黒花シニグの座元である池田住統氏から指導を受けてひとりで拝むことにした。その後崇りはなかった。以前はシニグ道（神道）を通つてハジピキパンタ經由でターヤパンタまで行つたということだが、引き継いでないので道順もわからず、しかも道を違えることはできないこととしていたので寺崎の地だけで祭るのみにしたということである。

寺崎シニグ道は、二年に一度行われるシニグのときだけ通る神道である。特殊な道で通るのがとても難儀だつたという。クルパナシニグは、増木名池を通らなければならなかつた。水かさが増しているときは、荷物を頭に載せて胸まで水につかつて渡つたという。

最初に開発祖神が与論島に上陸したのは、赤崎だといわれている。その次は、黒花と寺崎だといわれ、その祖神が通つて行つた道がシニグ道だといわれている。

寺崎シニグの祭主だつた田畑氏の前の地主は、龍野氏である。龍野氏の高祖は、花城与論主の二男殿内与論主であることを思うと、悠久の昔に思いがかりたてられていく。

シニグは、シニユグ、シヌグとも言われる。語源について、「シヌグ」は、「災厄を凌ぐ」の「凌ぐ」が転訛（てんか）したものだという説がある。これは語感音から推測したものではないか。「凌ぐ」という動詞を神様にするとは考えられない。また、奄美の開闢（びやく）神の「シニレク」のことだという説がある。

龍郷町の平瀬マンカイは、海のかなたのニライ・カナイから「稲魂」を招いて行われている。日本民族は「稲・米」を何かと重宝・尊んできている。寺崎シニグや黒花シニグは、海からきた開発祖神が稲種をもたらしたので、一体化して祭ったものではないか。与論町誌1124頁に「シニグ」は「稲穀（シニグク）」が転訛したものであると述べられている。僭越だが、これに賛同する。邪氣をデークで打ち払う「ノウーベー、ハーベー」の呪文の意味もよくわからない。

神の祟りを恐れ、禁忌をし、サークラに籠り、慎み深く執り行われる「シニグ」の語源がはっきりしないとは？なんとも・・・

平成十九年七月十七日記

グシヤヌヲウギ

グシヤヌとは与論語で杖のことであり、ヲウギはサトウキビのことをいう。

祭りのときに神棚の両脇にサトウキビを立て供える家がある。トウラがその意味をきいたところ三例あった。

その一、以前納税は砂糖でしたから。

その二、ご馳走を担いであの世に持っていくための担ぎ棒。

その三、杖にするためのもの。

沖縄でも同じようにお盆や祭りのときにサトウキビを供えるそうである。そのキビをグウサンウギというと書いてあった。グウサンは、与論語ではグシヤヌである。先祖があこの世を行き来するときの杖だそうである。トウラは、三の杖に軍配を上げることにした。供えた後のグウサンウギは、沖縄では子供たちが分け合って食べたとも書いてあった。

トウラが中学生の頃、学校の行き帰り道端に積んであるさとうきび

を抜き取ってかじったことがある。

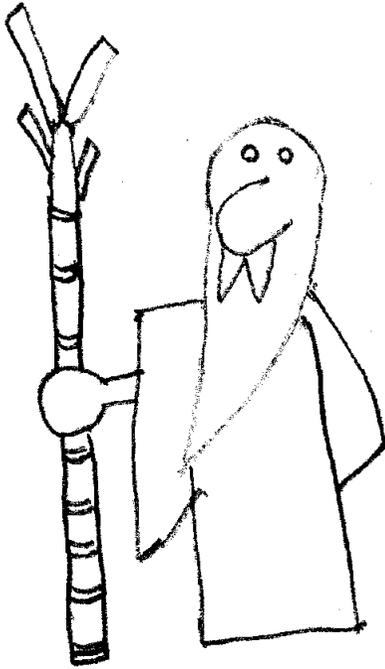
その頃、音に聞こえた名物ヲウジャ（おじさん）がいた。そのヲウジャは、中学生が自分のキビをとって食べたりに、自分をからかったりするといつて、しばしば学校に来て校長にトウジキル（抗議する）とということだった。悪ガキどもは、そうすることを面白がり、さらにするということさえあった。ヲウジャは独身で、メラビ（年頃の娘）をみると鼻の下を伸ばし言い寄る、いわゆるスケベといわれた。エロ話がことさら好きだった。トウラも直接聞いたことがあるが、微に入り、細に入るリアルな話だった。当時中学生の身であるトウラに分かるはずもないのに。誰彼となくそんな話をするところから、ヲウジャの名前はエツチな人の代名詞になった。

また、ヲウジャは働き者で、米俵を何十俵も積んだ。米俵の数が金持ちのバロメーターだった。ヲウジャは、さらに多く見せようとムンシックブ（もみ殻）俵を積んでいと噂された。それでそのヲウジャの名前は、ドンカシユン（ありもしないことを誇張していること）する人の代名詞にもなった。憎めないどころなく親しみのある名物ヲウ

ジャの名前は代名詞になって今も生きている。

それにしても今の子どもは、ヲウギもバンシルイもキンカンもとつて食べようとしない。そんなことをぼやく人はムカシンチュ（昔人）と呼ばれる人である。

神様になった昔人は、グシヤヌにしたサトウキビをあの世でかじっているに違いない。



平成十八年九月記

魔目

「古事記」によるとイザナギノミコトは、黄泉の国から追っかけてくる邪鬼に桃の実を三つ投げつけて退散させたとある。これは、桃の実には悪霊邪鬼を払う霊力が宿っているという中国思想から来たものだといわれている。

与論でお盆のご馳走にアダンの実を供えるのは、先祖がご馳走を持ち帰る途中で、餓鬼魔が横取りしようとするときに、そのアダンの実をちぎって打ち払うためのものだそうである。桃の実が、アダンの実に替わったもので、古事記に由来しているのではないか。

鬼ヶ島の鬼退治をする「桃太郎」童話がある。

じいさんは山へしばかりに、ばあさんは川へ洗濯に行きました。大きな桃が流れてきました。ばあさんは桃を持ち帰りました。桃が割れて桃太郎が生まれました。桃太郎は、黍団子を腰に、家来の猿、雉、犬を従えて鬼が島の鬼退治に行きました。

この童話作者の頭をかち割ってみると。

桃を拾ったのは、じいさんではなく、ばあさん（女性）である。桃は女性の丸いお尻を思わせる。エロカッコイイ。桃が割れて桃太郎が生まれる。桃には鬼退治の靈力が宿っているから、桃太郎は桃から生まれる必然性がある。黍団子は兵糧・弾薬である。猿は、戦略・戦術の猿知恵を出す知恵の代表、雉は空から敵情を偵察する、いわば軍事衛星の情報屋、犬は戦闘員である。動物の特性を軍事戦略に合わせてうまく使っている。この童話には、これらのことが隠し味となっているので、今も色あせずに読まれ続けられている。これが作者の頭の中にある設計図である。

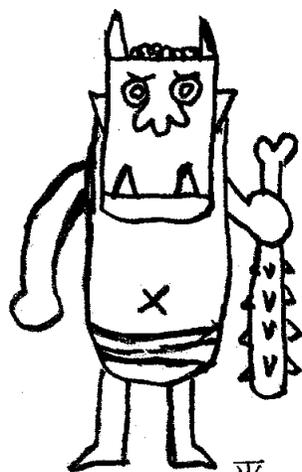
どうです、そこまで解き明かすドウダンミン男、偉いでしょ。

神社で節分に「福は内、鬼は外」と豆まきをする。以前は大豆を煎ったものだったが、先日のテレビでは、落花生が使われていた。

豆は魔目、煎るは射る。魔物の目をいって退散させる。

この豆をいただと体の中の病魔邪鬼を払って、一年間無病息災にあずかる。落花生にしたのは食うための配慮だろうか。

お正月の献立に豆料理が入る。豆の霊力で一年間の邪鬼払いをしてもらうためである。また、「まめ」の漢字は「忠実」である。まじめ、誠実であり、「まめに働く」はいとわず精勤することである。「まめに暮らす」は達者なことでいずれもい縁起を担ぐものである。昔は黒豆が使われたそうだが、今は高価で手に入らない。黒は力強さの象徴でなおいいものとされた。



平成十八年九月記

ウンワラビ

ウンワラビは、人魚のことだと言われている。人魚は上半身が女、下半身が魚の想像上の生物とされ、ジュゴンがそれに近いと思われる。沖縄では犀魚（さんのうお）と呼ばれ辺野古沖や名護湾沖で見つかっている。天然記念物である。

与論ではウンワラビが釣れたときには、ウンバフ（海に小物を入れて持っていく二十センチ四方程の木箱）の中に入れて泣かさないうにする。そのためにウンバフを持って行く。泣かすと台風が吹くと恐れられている。ウンワラビをいじめたり、陸に揚げてもいけないとされている。この話からすると人魚とは別ではないかと思われる。

K氏があるとき、ウンワラビを釣って浜に置いていた。それがある婦人が持ち帰り、ウプナビ（口の広い大きな鍋）で煮て豚に食べさせた。すると与論の空がにわかにかき曇り、大風が吹き荒れ、災害が起きた。その日、沖永良部に電話をかけて天気をきいたら、風のないべた凧だということだった。それ以来、K氏は海に行くことをやめたそ

うである。K氏は糸満漁業の経験もある海達者な人である。この話は、K氏本人が実体験として話したことである。

与論でいわれているウンワラビは、ワラビ（子ども）という名前が付いているし、ウンバフにはいる程の小さなものだから、ジユゴンとは異なるものではなからうか。ジユゴンの子どものことなのか、はたまた海にいと信じられている妖怪なのか、誰か教えてもらいたい。

《イシャトウ》

Y氏は、ある晩、岩の上から投げ竿で釣りをしていた。魚がかかった。するとそこに灯りが見えた。デントウアイキ（懐中電灯を使った漁）の人だと思い、「ヌガ、ワヌワジャクシユルムナー（何で私の邪魔をするのか）」と言った。すると灯りが無数に増えて、さざ波さえ立つてきた。

ああ、これはイシャトウだなあー、と思った。そう思ったとたん恐怖でがたがた震えた。あわてて釣り糸を断ち切り、今まで釣ってあった魚もうち捨てて這々（ほうほう）の体で逃げ帰った。その灯りは南

側の岩の所へ入っていった。気が付いたら被っていた帽子もなかった。それ以来、魚釣りは一切止めた。

Y氏が五十歳代のときの実体験として語ったことである。

母が若い頃、さとうきびの搾りながらやススキを束ねてたいまつを作り、いざり漁をしたそうである。ある闇夜、弟の静治と漁をしていたら、小人が小さな明かりをつけて、二人の前になつたり後ろになつたりして歩いていった。気にかけてながら、二人とも押し黙つたままでいた。目の前に大きなシガイ（手長たこ）が手を広げ、真つ赤になつて座っていた。銚（もり）で突き、頭上にあげ「シガイとつた」とやや大きな声で言った。弟にというより怪しげなものに聞かせるためであつた。シガイはたいまつのみを浴びながら、長い手で盛んに蛸踊りをした。その後小人は姿を消した。

帰宅して弟に「小人を見たか」ときいたら、「うん、見た」と言った。ばあさんが、「ウワーシギヤ、イシヤトウエータイ」と言った。

姉が十歳の頃、母は姉を連れて寺崎海岸にいざり漁に行ったそうである。すると舟に乗って近づいてきて「トウラリュイキー」といつてから去っていったという。あれは「イシヤトウだった」と確信的に母は晩年話していた。

イシヤトウは想像上の妖怪だが、イシヤトウの体験談は与論でいろいろ語られている。岩やウシクの大木に棲んでいて、夜、海に行く。悪口を言ったら仕返しをされると恐れられている。

片足でケンケンをして歩く、ハタパギと言われる妖怪もいる。これらに似た妖怪は、大島ではキンムン、沖縄ではキジムナー、本土ではカッパである。

平成十八年四月記

マーブイ

「たまげる」とは、方言だとばかり思っていたら、「魂消える」と書き、れっきとした日本語だとはたまげた。「おっ」という接頭語をつけてひどくびっくりしたとなる。与論語では「タマシヌギテ（魂が抜けて）、タマシヌガチ」という。人間は肉体と魂からなっていて、魂は肉体から抜け出ることがある。死ぬと魂は肉体から抜け出て、魂は永遠に生き続けると考えられている。幼児の死亡率が高いのは、魂が抜け出やすいからだと思われる。

幼児の頭頂と額の間に骨がまだ接合されていないやわらかい部分がある。ピチュルキと呼ばれ、ここから魂が抜け出ていくと考えられた。丸刈りをするときにこの部分は残して刈り、マブイと呼ばれた。

新生児のマーブイは抜けやすく、急に極端にびっくりさせると抜けるのでそれをしてはいけないとされている。悪魔悪霊がさらうので枕もとに鎌や刃物を置く。これは魔よけである。

与論の諺に「ワラビヌウイナンダチフミンナ（子供の早い成長ぶり

を褒めるな」とある。これはそんな子どもは悪魔も好み、褒めるのを聞いてマーブイを取るからだという訳である。トウラの先妻のヤーナ（家名）はハナで、二十七歳で早死にした。ハナの名前は「花」に由来するのか、「愛し子」の「愛（ハナ）」に由来するのか分からない。彼女が死んだとき、彼女の祖母は、「ハナは、あの世の神様に好かれたんだ」と独り言のように言った。神様は、花や美しい人を好むということから、名前のハナとかけて言ったのだろうかと一人思った。

赤子の着物を仕立てるとき、背縫いの紋を入れるところにマブイ（守り）として、近親長寿者の白髪や米三粒を縫い込んだ。また女の子は赤い糸で、男の子は白い糸で~~X~~の形に縫いつける。これは女陰を表し、魔物悪霊が嫌い退散する魔除け印である。悪魔幽霊はお日様と女陰を恐れるという信仰からである。

また、幼児を夜間、外へ連れ出すときは、魔よけのために額に鍋すすをX型に塗るものだといわれた。

夜道で〇〇某を見たが、あれは病気で伏せているはずだが不思議だと思ひながら帰った。翌日その人が死んだと聞いて、ああ、あのと

き見たのは魂だったんだ、という古老の話を聞かされるものだった。

今どき、こんなことを言うと、「あなたはマーブイを信じているのですか?」、ときかれる。0か1かのデジタル時代、YESかNOかはつきりしなければ蔑まれる時代。正直なトウラは、YESでもNOでもなく、返答に困る。

【招魂】昔、人が死ぬと生き返らせようとして死者の衣を持って屋根にのぼり、北に向かい三度その名を呼んだ。(広辞苑)

【鎮魂】生者の遊離した魂を招いて、その身体に鎮めること。

マーブイは、言葉や祭事(招魂祭、鎮魂祭、地鎮祭など)の中で生きていく。YESかNOではなくて、その間にあるもやもやの中、言葉で言い表せない深層心理の中で生きていく。

平成十九年四月記

マーブイユシ（靈魂寄せ）

弟は仮死状態で生まれてきた。産婆である伯母が背中をさすり、両足を持って逆さにしてたたいて蘇生させた。ヤーナー（家名）は、マサとつけた。ビニヤ（虚弱）で育ちが悪かったので、名前を頑丈なウシ（牛）に後年付け替えた。

彼が幼い頃、夜中に何かにおびえたように泣き叫んだ。それが二日続いた。祖母が「フヌワラビヤー、マーブイヌガチャイ。マーブイユシシリバドウナユイ（この子は靈魂が抜けている。それを呼び寄せなければいけない）」と言って、おむすびを数個作り、芭蕉の葉に包んでテル（竹かご）に入れて、泣き出した前日に遊んだトウマイの浜へ行つた。

沖に向かつて大声で「ワー マサガマ マーブイ ハックウヨー（私のマサの靈魂よおいで）」と叫びながらおむすびを投げた。ナーバマ、湯浜と場所を移して同じことをした。

祖母はマサガマの目をみつめて、「マサガマ マーブイ ヤキチャクトウ、

イダウプヤカプドウィリョー（マサの靈魂が戻ってきたから、大きく成長しなさい）と言ひ聞かせた（言霊入れした）。その晩から不思議に泣かなくなつた。それから日に日に元氣になつた。今日まで大きな病氣をすることなく、東京で定年まで教員を勤め上げてなお元氣でいる。

へマーブイユシその2

トウラの長女が三歳の時、その母親は急逝した。葬式の時親子の永遠の別れになるからということ、出棺前に、ふたを開けて顔を見せた。とたんに「わあ！」と大声を上げると同時に飛び退いた。そばにいた女の先生の首に飛びすがり泣きわめいた。女の先生が外へ連れ出してあやしたが泣きやまなかつた。トウラは余計なことをしたと後悔した。葬式が終わつてもその先生から離れようとせず、手を焼いた。

与論に帰つてきてある晩、その長女が夜中いきなり飛び起きて、夢遊状態で泣きじゃくつた。何をどうしても泣くばかりである。翌日の夜も同じ状態になつた。祖母（私の母）が、「フヌワラビヤーマーブイヌガチャイ、マーブイユシシリバドゥナユイ」と言つた。

翌日、早速おむすびを作り、ソイ（竹製のざる）に入れてトウマイの浜に行った。「ワー雅子マーブイハックヨー（私の雅子の靈魂おいでよー）」と言って海に向かっておにぎりを投げた。場所移動をして繰り返した。隣のナー浜へ行つて同じことをした。雅子に「よし、もう雅子のマーブイを呼んだから、心配ないよ、大丈夫」と行つて抱きあげた。トウラは雅子に「おんぶして帰ろう」と言つておぶつた。

その晩からぐつすり眠り、二度と泣くことはなかった。母は、祖母がしたような「マーブイユシ」をした。与論での昔のマーブイユシは、祖母のやり方と違つて、ヤブを頼んで家でしたと伝え聞いている。祖母が北の海に向かつておむすびを投げたのは、昔日本各地であつたという「魂呼び」が北に向いてしたからだろうか。それとも、海の彼方のニライ・カナイ信仰からだろうか。おむすびはご馳走なので魂も欲しがるといふのである。父や私は、祖母や母がすることをただみているだけであつた。皆さんは、俗信だと一笑に付すだろうか。

平成十九年四月記

グシヨウ（後生）

グシヨウとは、あの世、死者の世界のことで、「後生」の与論語読みである。人は死んでも魂は後の世で生き続ける思想を表した言葉である。仏教の死生観に、前生・今生・後生があり、前世・現世・後世の世界観がある。

母の九十七歳のお祝いをしたら「グシヨウデイムチ（後生への手土産）」といって喜んでいた。与論のお年よりは、大きな喜び事があると「グシヨウデイムチ」になるといい、それがお礼の言葉代わりになっている。あの世にいる家族、知人への土産話にしようというのである。死んだ家族はあの世にいて、自分もやがてまた仲間入りをするのだと思っている。魂はあの世で生き続けると信じている。

最晩年の母は、死を恐れたり、寂しがったりするようすは何えなかった。外に出て働けなくなると「早く連れて行ってくれ、早く呼んでくれ」というのが、先に死んでいった父や祖父母への祈願詞だった。あの世があつて、死ぬとはそこへ行くことなんだ、そこには旦那や父

母、実家の父母、姉たちがいて、またいっしょになれる、と、そんなことを思っているようだった。「私が死んでも決して悲しむことはないよ」というのを何度か聞いた。

与論では自分の家以外のところで落命すると、葬式の朝、神官と喪主はその場所へ行って魂をお供してくる。今は便利な携帯電話があつて、到着時間を正確に知らせしてくれるから、親戚の者どもは門の外にまで出て出迎える。死者の名前を呼び「イダウワーリョウ（お帰りなさい）」と泣き声とともに口々に言いながら迎え入れる。傍観者には見えないが迎える人たちには、その姿が見えているような振る舞いの光景である。勿論亡骸は前日から家の中に横たわっている。

生前親しかつた弔問客がくると、亡骸の耳に顔を近づけて、「何某がみえたよ」と教える。客も死者に話し掛ける。旅から兄弟、子や孫など肉親がくると「ニヤマ ウレー〇〇が来たよ」と教える。食事をするとときは枕辺の祭壇にお食事の膳を供え、祭り人が食事をはじめるとを奏上し、みんな打ちそろって礼拝してからはじめ。体が動かず、口が利けなくなっただけで、そこに「います」がごとくに進められる。

与論民謡の「道イキントウ」節に、「グシヨウぬ門や一門 阿弥陀門
や七門 うり明きてい見りば 親ぬいめい」と歌われている。あの世
の門を開けて見ると親がいる、と確信的信仰歌である。

この道イキントウ節が作られた昔は、台風や旱魃などの自然災厄、
流行病などの病苦、薩摩藩による過酷な搾取地獄の中をあえぎあえぎ
の生活の連続であった。打ち続く苦難災厄の雲間に民謡を歌い、心を
癒し、身を奮い立たせて誠実に生き、いざれ行くグシヨウに永遠の幸
せを思い描き、生きる支えにした。グシヨウ信仰はあの世のことだが、
現世を生きる糧である。

与論の先人は無学だったが、生活苦にめげず、精神的に豊かに生き
る歌を作り、歌い継いできた。その与論民謡に私どもも心を癒して生
きている。

シタリヌスーリー エースーリー

平成十九年三月記

チユラプニ（清らかな舟）

平成十五年に火葬場ができてから、与論の墓地、葬送儀礼関係が大きく様変わりしつつある。

まず、墓地の風景が大きく変わりつつある。

以前は納骨甕（かめ）が並んでいて、その周りには海浜の石や砂利が置かれていた。あちこちに御霊屋があり、新しいものの周りには赤や白の弔旗が立っていた。石の墓碑が立っているのは少なく、墓地全体をさえぎるものがなく見渡せた。今は納骨堂が建ち並ぶようになってきた。やがては、かつての田園が、ビル林立に変わったのと似た光景が目に見えかぶ。あと五年も経つと、昔の面影はなくなる勢いである。

昭和三十年頃までの葬式は、ほとんどすべて、親族一同の作業によるものだった。危篤状態に陥ると集まって夜伽（とぎ）をした。いよいよだというときには、一族の有力者を「スーアタイ（総責任者）」にして、話し合つて準備・手配をする。もう一人「トーグラアタイ（台所係）」という大役があった。その他に祭り人、坊主アタイ、酒アタイ、

帳付き、ヘーク人、プーク人、池掘り人、鍋アタイ、加勢人などが割り当てられた。

一、総アタイ↓予算、計画、進行、接待などすべての総責任者である。使い走りを2・3人つける。

二、トーグラアタイ↓まかないの責任者である。そのほかにマシ（枡）アタイと鍋アタイが置かれた。

《マシアタイ》「マシ」は枡（ます）で米・穀類を量るもので、持参してくる米、穀類、味噌、塩、豆腐、薪などを記帳した。物品が一度に多量に必要なになるので、みんなで持ち寄り相互扶助した。終戦後トウラの祖父が死んだとき、祖母の実家から米俵（百五十斤）を二人で担いでこられたのを印象深く覚えている。米はもみ俵から出し、もみをすり落とし、臼でついて準備するのである。豆腐は石臼で豆を挽き、作る。

《鍋アタイ》は煮炊きの采配者で女性がなった。屋外にたくさんの鍋をしつらえて煮炊きをするので、風や雨の日は大変だった。しかも火力は薪である。来客を何名見積もって準備すればいいのか、

見込み数によつて豆腐の切り方も違つてくる。過不足があつてはならないし、責任者の力量が試され、苦惱させられた。この点今は、仕出屋に注文すればいいので非常に楽になつた。新生活運動でトイグラへの物品の持ち込みもなくなつたので、マシアタイもいらなくなつた。お茶も缶茶ですむ。茶菓子・漬物も買えばいい。大楽チンになつた。

三、
ヘーク人↓棺桶と御霊屋を作る。身内の大工が当たるが、いない場合はほかから頼んでさせた。作業場の上方に、舟の帆か筵（むしろ）などで覆いをして、お膳に酒・米・塩・曲尺などを載せ、「チュラ舟を作ります」と祈禱を捧げてからはじめた。

棺桶がなぜ舟なのかは、死んだら海の彼方にあるニライ・カナイへ行くという思想があり、棺桶はそこへ乗っていく舟に見立てたわけである。担いで墓に行く道すがら、棺桶のそばについて歩く人が「ジンプードウ ヨウヨウドウ（順風だ、海はなぎでようようだ）」と言ひ聞かせたのもニライ・カナイへ行く途中であることを意味する。近年、棺桶やガンは農協が作り、家で作る場所は

なくなつた。今日では火葬になり、棺桶は既成の寝棺になり、ガンは省くところもある。やがてこれが一般的になると思われる。作業場の上方を被うのは、この世は、明けの世、あの世は陰の世だから、靈魂の陰の世にするためである。会葬者席にテントを張るのも、単なる雨除けではなく、それに準じて陰にするウヤメー（敬い）思想からだと思われる。位牌の上に傘を差してお供したり、改葬を夜明け前にしたりするのも同思想である。

《加勢人》弔旗七梳、箒2、提灯2、草履2（鼻緒をつけない）、ガジマルの花などを準備し、ガンの周りの飾り付けをする。左繩（通常は右回りで繩をなう）をなったり、草履を作ったりできる人が少なくなってきた。火葬ではやがてこれらも必要ないとするのではないかと思われる。

四、池掘り人↓血筋のちよつと離れた人を三人頼む。喪家で昼食をすませ、鍬、スコップなどの道具のほか酒、塩、米を持っていく。そのうちの年長者が、墓の地神に「ここに何某の屋敷穴を掘りますお許しください」と祈祷し、お酒を捧げる。そして隣接

の墓にも「隣に何某の屋敷穴を掘りますので驚かないでください」とサーリワキ（祝詞）をしてお酒を捧げる。あと酒をいただいた池掘りをする。葬列がきたら、藁束に火をつけて墓地の入り口で迎え、案内する（墓地は陰の世だから灯りをつけて案内するのである）。なぜ穴掘りといわず「池」掘りなのか。棺桶がニライ・カナイに行く舟だから、それを浮かべる「池」だとドウダンミンは思っている。もう一つ、穴に埋めるのは犬や猫などの畜生扱いで失礼になり、バチ（罰）が当たる思想から、「池」言い直していると思われる。

五、プーク人↓棺桶を墓まで担ぐ人。奉公人と書くが、孝行をするのだから、「公」は「孝」の字を当てるのが適切だとドウダンミン男は思っている。甥か近親の屈強な者が四人であたる。昔の悪路を遠距離運ぶのだから、かなり難儀だったと想像される。トウラは、父・母を火葬せず、埋葬した。墓地までの距離が一キロ足らずと近いので、以前のように孫たちに担がせた。「肩に掛かる重みは、恩の重さだ、孝行だからやりなさい」といつてさせた。プ

ク人には肩に当てる新品のタオルを渡されるが、昔はそれが謝礼だったそうである。

六、祭り人↓パラジのうちの長老で祝詞ができる人が当たる。祭壇の前に座り、線香を絶やさずともし、お酒を上げる。

七、酒アタイ↓大きめの木杯に酒を注ぎ、弔問客に上げる。死者が長寿の場合は「サーギ（白髪）」と言ってあげる。長寿にあやかることを意味する。死者からの「情け」と言ったりしている。飲酒運転撲滅運動が普及し、急速に衰えてきた。係を置かないところも出てきた。以前は、通夜の席には酒はつきもので、酔って無礼講に及ぶ者もいた。

八、ナガチャー↓死んだ日に通夜をして、翌日葬式のあげく墓から帰ってきてナガチャーをするのが以前は一般的だった。勿論準備が間に合わなくて、三日目に葬式とナガチャーと三日祭りを一緒にすることもあった。近年は、子や孫たちが島外にいて、葬式に帰ってくるので三日目にするものが多くなった。以前は飛行機便がなくて間に合わせることは難しかった。

ナガチャーは、打ち上げの意味があり、働いてくれた方々へ喪主がお礼の挨拶をする。そのとき帳付けは、上座に座り、弔問客数や持参の金品の報告をする。昔の帳付の報告は、氏名、品目、量、金額を全部報告した。親族だけなので人数が少なく個人情報も全部共有した。その昔は、帳付けのできる人が少なかったから上座に座らせて敬った。今も上座なのはその名残である。三日祭りは、最初の祭りになり、近親者が行っている。

九、葬式の形式↓明治時代には一族の長老で心得のある者が神官代わりを務めたところもあったそうである。これまでほとんど神官が司祭してきたが、海園寺住職が来島以来、仏式葬儀が増えてきた。他に創価学会やキリスト教の葬式もある。全国的には、仏式が多数で神式は二十割足らずだそうである。

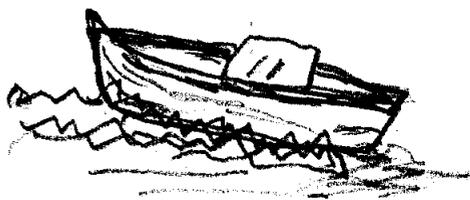
与論の葬送は、風葬、埋葬、火葬と変遷してきた。それに伴いやり方も変わってきた。

交通機関が発達して、島外から子や孫、肉親が参集する。豪華な祭

壇の周りに生花が所狭しと立ち並ぶ。通夜、葬儀に何百人と参集し弔
つてくれる。肉親、知人友人、諸人の手の上、袖の上、花の上をチュ
ラ舟に乗って、ニライ・カナイの極楽浄土へ送られていく。十日、二
十日、三十日祭と追善供養してくれる。

えーらー！　ぷーらー！　後生・極楽　いいじゃないか皆さん！

平成十九年三月記



枕 飯

与論島ではおおかた在宅死を迎える。例え入院加療中であっても、余命二・三日と医者に言われると、連れて帰り自分の家から家族・近親者の見守る中を旅立たせるのが習わしになっている。とてもいいことだし、ずっと続けていつてもらいたい美風である。

死亡すると枕辺に枕机を置き、お膳に水の初、花（ガジマル）、線香、杯を供える。親戚の長老のうちから祭り人をお願いして礼拝をする。祭り人は、祝詞を奏上し、線香を絶やさず酒をあげたりする。お通夜に参拝する人は、枕辺の祭壇（台）に向かつて礼拝する人と、遺体に向いて礼拝する人とあるが、祭壇に向く方が正しいとか。

出棺までは三食とも家族といっしょである。お膳にご飯、みそ汁、小皿に味噌と塩を供える。飯は山盛りにする。その意味は、飯をたらふく食べたいために生き返ってくるかもしれないということからだ。うである。昔、山盛りの飯がいかに魅力的であったかが伺い知れる。この飯のてっぺんに箸を一本立てる。これは、死んだ方のものですよ。

という「シミ（指標）」だそうである。

その昔、朝戸集落に按司根津栄（島の統治者、英雄豪傑）が住んでいた。ある日按司根津栄が舟倉の海で漁をしているとき、早馬で沖繩から敵が攻めてきたことが告げられた。根津栄は駆け戻り、「腹が減つては戦はできぬ」と食卓についた。その時、ワラビ（幼児）がとことこことやつてきてご飯の上に箸を突き立てた。根津栄は気にもとめずにその箸を取つて急ぎかき込み、愛馬にまたがり出立した。

並みいる敵をなぎ倒し、征伐して茶花の海岸まできてほつと一息ついたところに、沖に泊まっていた敵の船から天に向かって放たれた矢が、根津栄の頭の天辺に突き刺さり絶命した。

按司根津栄神社には三体の頭骨が祭られていて、真ん中の頭骨の天辺には矢の跡と思われる穴が開いているそうである。両脇の頭骨は、キヤードウキとキンジュールキの神様だといわれている。

そんなこんなことからだろう、与論ではご飯に箸を突き立てることを極端に忌み嫌い、子どももの頃に厳しく叱られた。

ガンエータッチョーヤー！

平成十八年九月記

ユイタババー（交換行為）

物や金があまりなかったその昔は、物品、労力を出し合い、依存し合う「ムエー（模合い）」、「ユイ（結い）」をして暮らした。「家造りムエー」、「砂糖ムエー」、「海ムエー」などがある。

家造りは、材料、道具、労力すべてムエー・ユイで行われた。

海ムエーは、手漕ぎだったために、数名が必要だった。網の追い込み漁、舟の上げ下ろしなど人数がいる。何より、舟や網を誰もが持っているわけではなかった。

砂糖ムエーは、工場が必要なので、どうしても依存しなければならなかった。炊く技術もうまい人に頼らざるを得なかった。

してもらったら、してお返しする「ユイタババー」。喜びも悲しみも分かち合う冠婚葬祭。特に葬祭、中でも葬式は誰でも気をつけてユイタババー精神で行っている。

葬式には必ずチョウチキ（記帳担当者）をお願いして、参列者の持

参品を記録してもらおう。以前は、台所への持参品は別に責任者をおいで記録していた。

「記帳は忘れるためにある（みんな覚えておくことができたら記帳はいらないわけである）。トウラの父と母の葬儀・通夜に参列いただいた人は、延べ人数にすると四千人を超える。葬儀への参加・持参等はユイタバーだと言われ、記帳されているのを見て、お返しをする。四千人を超える人々を覚えておくことなど不可能であるから、記帳簿に頼る。パソコンのお陰様で、氏名をアイウエオ順に並べておくと便利である。

現在の持参金は、近い親族以外は、香典は千円均一となっているので気軽になった。以前はもらったものに相当するものを持参しなければならなかったから面倒だった。

都市部では「香典の半返し」をするのが常識であることをトウラは知らなかった。昔ながらに相手方に同じことがあったときに同じようにすればいいとばかり思っていたトウラは、近親者から面と向かっ

て半返しを要求されたり、返しの品が半額分に当たらないことを抗議されて面食らい、無知を恥じた。

受けた情けは心に留め置き、何かの折りにお返しするのが与論の風習だった。そんな昔風を引きずっているドウダンミン男には、時を置かずには返礼の品を持って来ると突っ返されたような不快感があったが、近年慣れてきた。子ども、兄弟、親戚は都市暮らしが多い。しかもスリード時代、都市も田舎もなくなった。私も「恩義を被ったらいかん」、忘れないうちにと急ぐこの頃である。

葬式の翌日に行われる「ナガチャードトウ」では、祭り人の次の偉い席に「チョウチキ」を坐らせ、敬いもてなす。それはその昔、俗にいう無学が多く、記帳できる人が少なかった。記帳者は貴重だった。そのため今でもチョウチキを尊ぶその風習は残っている。

受付責任者は、通夜及び葬式の参列者数や香典の合計金額などを報告し、故人の遺徳を偲ぶ。トウラも以前に受付をしたことがあったが、

記帳額と現金が合わずに苦勞したことがある。その体験から「決して金額を合わせようなどとしなくていい」と言った。今時は加勢人も多いし、千円均一にもなつて楽になつた。その昔は、誰が何をいくらと、持参した物全部を全員について読み上げた。それはドウナーパラジ（親族だけ）だけだったからである。近年の報告内容は、参列総数だけと簡単になつてきた。ナガチャーにはチヨウチキ、台所、お茶出し役など加勢していただいた方々に対して喪主からきちんと謝辞が述べられる。

ユイタバーは、葬儀において以前にもまして行われてきている。私は、父母、先妻、叔父の分をしなければならぬが、一生かけても出来ない。子どもに引き継ぐしかない。遺言に準じ言いつけておきたい、ユイタバーである。

平成十八年十月記

輪廻転生

母は、晩年のある日、トーグラの椅子に座り、庭を眺めていたら、玄関から大きな男が入っていきのが見えた。お客だと思い「オモテ」へ行ってみたが誰もいなかった。その翌日、叔父死亡の電話が来た。

母が「昨日来たのは德里叔父だったのか、ナグリヤー」と言った。与論では人が死ぬときは、魂は肉体を離れていくと言われている。

お盆のとき蛾や虫が飛び込んでくると先祖の生まれ変わりかもしれないので殺してはいけないといわれる。チヨウチヨが生まれ変わったものだという話によく聞かされる。トウラも従兄弟兄が眠る沖繩の健児之塔参りをしたとき、まわりついてくるチヨウチヨに靈気を感じたことがある。

与論民謡に「アガリウチムコウテイ トウビユルアヤパピル マテイマチユリ ウユイシャピラ（東に向かつて飛んでいく蝶さん、しばらく待つてくれ、愛しい人に伝言頼もう）」という一節がある。チヨウチヨは化身であり、あの世とこの世を飛び交っている。その蝶にあの

世にいる愛しの人に伝えておくれという恋慕の唄だと思われる。

ある雑誌の記者から「あなたは靈魂を信じますか」ときかれたことがある。日常生活では意識しないが、何かのときには「ある」と思うことがあると答えた。深層心理の中では信じていると思う。先祖を祭つてある神棚の前や墓碑の前に額ずくときは、そこに先祖の靈魂の存在を意識し祈願奏上する。

与論語では死ぬことを「グシヨウに行く」という。「グシヨウ」とは「ごしよう」のことで、後の世で生きることの意味する。それは葬式のとときに端的に表れている。生前の愛用品や小遣い銭などを棺桶の中に入れて持たせる。それに先に死んでいった肉親などのために、「これは〇〇へのお土産」と言い込めて持参させる。これはあの世でまた肉親に会える、また迎えてくれるとの信仰からである。

与論島の死生観は、魂はあの世で生き続けているというものである。自由に飛び回り、靈力は子孫を守る。あの世とこの世は全く断絶したものだとは思っていない。お盆のときは、お墓に行つて先祖をお供してきてご馳走をあげ、すんだらまたお墓へ送る。与論民謡の「道イ

キントウ」には、「グショウ又門や一門、阿弥陀門や七門、うり明きて見れば、親ぬいめい」と歌われている。

「往生」とは死ぬことだが、同時にあの世に「往」つて「生」きる。つまりこの世では死に、あの世では生まれることになる。魂は、死にかわり、生まれかわりを繰り返す。これが佛教の輪廻転生思想である。

死にかわり、生まれかわりするときは何に変わるのか。

佛教ではあの世に三界（無色界、色界、欲界）あつて、悟りをひらいた者は色界に行けるが、その他一般の衆生は、欲界の六道（地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上）の中を生まれ変わり死に変わりを繰り返すという。地獄に落とされるか、畜生になるか、人間に再び生まれるのか、それは現世における行いしだい、と教えている。今人間であるのは前世がよかつたからである、感謝してクンパラナクツチャ。死んだら蝶になるか、はたまた天上の星と輝くかは、あなた次第。

次の詩は世界中でヒットし、日本で曲が付けられてはやっている。

平成十九年一月記

千の風になつて

作者不明 日本語詩 新井満

私のお墓の前で 泣かないでください
そこに私はいません 眠ってなんかいません

千の風に 千の風になつて

あの大きな空を 吹きわたっています

秋には光になつて 畑にふりそそいで
冬はダイヤのように きらめく雪になる
朝は鳥になつて あなたを目覚めさせる
夜は星になつて あなたを見守る

私のお墓の前で 泣かないでください
そこに私はいません 死んでなんかいません

千の風に 千の風になつて
あの大きな空を 吹きわたっています

千の風に 千の風になつて
あの 大きな空を 吹きわたっています
あの 大きな空を 吹きわたっています

ハンシヤ

ハンシヤとは、風葬墓・風葬場所のことである。ハンシヤから牛の草や薪を取ってくる崇りがあるようなことがいわれ、近寄りがたい怖いイメーヂがある。

その昔、ミジグワー（生後七日以内に死んだ子、名付け祝いを待たずに死んだ子）の遺体はフブキ（藁で作った袋状のもの）で包み、ウンポード（藁などで編んだ牛の草などを入れて運ぶもの）に入れて父親や近親者二・三人でワラビガンシヤに葬った。現在は墓地の片隅に埋める。名前も付いていないので「祭りなどは行わない。

農協の農畜産物センターの南側高台にジュリ（遊女）墓がある。周りの木がなければヤンバルが見渡せる景勝地である。下の道を通るとおしろいの匂いがあると噂があるが、それは黒ツグの花の匂いだとある御仁が言った。

薩摩の役人を埋葬してある奉行墓は、九十七高地辺りの見晴らしのいいところにある。また、近くの高台に吉田家一門と赤崎家の墓があ

る。メーグチバンタの墓も最高の景勝地にある。茶花、ハキビナ、メーバル、宇勝、寺崎など海辺にある墓地もみんな景勝地にある。先人の先祖崇敬が伺える。

与論では明治三十五年に禁止されるまで風葬が行われていた。明治十年に鹿児島県から沖永良部に埋葬の論達があつた。それから埋葬に移りはじめたがなかなかその風習はやまなかつた。「何よりも大切な親や子を、動物同様に土の中に埋める不憫さとそのことによる死者からの祟りを恐れたからであらう。……鹿児島署から吉国警部が来て数ヶ月間滞在し、一斉に全島の風葬を厳禁した」（与論町誌317頁）。それでやっと途絶えた。風葬は、ジシ（ギシ又はジン・納し墓、直し墓）の入り口周辺や死体を置く慣わしになつている崖下に置き、白骨化する」と改葬・洗骨をしてジシに納骨した。明治三十五年以後は埋葬し、改葬洗骨して瓶に入れて自分たちの墓地に安置した。

三十三年忌を終えると霊は飛び衣（天の羽衣）を着て昇天すると考えられてゐる。風葬は禁止されたが、ジシへの納骨が禁止されたわけではなかつたので三十三年忌が済むとジシへ納骨された。この風習は大

正末、昭和初期まで続いたと伝えられている。当時はジシへ納骨することが孝行だと思われていた。その後、ジシ納骨が少なくなるに従い、だんだんと墓碑が建つようになった。

平成十五年に火葬場ができ、改葬の煩わしさもあつてほとんどの人が火葬するようになった。それが契機になつて納骨堂が次々と建設されるようになった。風葬から埋葬への転換点が明治三十五年、埋葬から火葬への転換点が平成十五年、百年間で三段跳びの変化である。

明治年間に痘瘡がはやり、ジシに担いで行つた人が倒れ、一家から二・三人不幸が出て死体累々となつた。処理に困つて崖下に放置された。それを集めて祭つてある空洞がメーグチバンタにある。

与論観光ブームのあつた昭和五十年前後の頃、観光客が鬮體（しやれこうべ）を持ち去る話があつた。またある研究機関が箱詰めにして持つていったところ、祟りがあり、元に戻したという噂も聞いた。

風葬は当時敬つた葬り方だつた。決して放置・粗末にしたわけではない。私どもの先祖を軽んじる不届き者には祟れ！祟れ！

平成十八年八月記

プツテイル

メーグチバンタの中腹に、プツテイルと呼ばれる納骨岩穴がある。主に城宇旧家の一部の先祖が利用していた。巨岩がそびえ立ち、大木が鬱そうと茂り、森閑として靈氣漂うところである。そこに一基の石仏が鎮座している。

石仏は、チブル石（菊目石）に彫られていて精巧・精細なものである。右足はあぐら型に曲げ、その上に右手が指をそろえて置かれている。左足は立て膝で、左手に宝珠を持っている。頭はチブル石の素肌そのままで、それがちょうど螺髪（らはつ・巻き毛）に見える。坐っている台石もチブル石をつかい、その素肌を蓮華の花びらに見せて蓮華台かわりにしている。素材に与論のチブル石を選んだ仏師のチブルに、思わず乾杯。その下の台座は、模様の異なる珊瑚石である。

この石仏は、見れば見るほど精緻（せいち）に彫られていて手の指先、足の指先まで見事なものである。彫った石工仏師の達人ぶりが伺え、それにも頭が下がる。

石仏の背中に「明和三・・・」と刻まれている。「明和三」の文字ははつきり読みとれるが、残念ながらそれに続く文字は欠けたりしていて読みとれない。「明和三」が制作建立年だとすると、西暦1766年で、今から約340年前のことになる。それ以来背後のプツテイルジシを守ってこられた。雨に打たれ、風に吹かれ、台風をしのいで黙ってたたずむ。ジシ（風葬墓地）に送られて来た死人を分け隔てなく冥土の旅へ案内し極楽へ成仏させる。葬送人々の泣き叫び、幾千幾万人の嘆き悲しみを見聞きしてきたことだろうか。

明治維新に吹き荒れた廃仏毀釈の大難を逃れ得たのは、この場所のお陰だろうか。諸人の悲しみをいやしてきた石仏自身の功德ゆえだろうか。今もお花、お茶、お酒が手向けられている。

ジシの名前の「プツテイル」の由来は何だろうか。「仏のいる」を与論語で「プツトウイヌイエル」というが、それが縮まり転訛したものではないか、とドウダンミンしたがいかがだろうか。

平成十九年四月記

Xデー

「死は、前よりしも来たらず」と、古人は言った。

「死は前からではなく、後ろから足音も立てずに忍び寄ってくる。あ
る日、ぽんと肩をたたかかれて振り返ってみると、そこに死神が笑って
立っている」ものだそうである。あら！まあ！

私の母は、九十八才で死んだ。九十五・六歳までは腰は曲がってい
ても家の周りの草取りや庭掃除をしていた。朝起きると神棚の前に坐
り、「今日も元気に起きられました。ウヤヤープジのお陰様です」と手
を合わせて拝むのが日課の始まりだった。庭に出なくなつてからは、
「お父さん、早く呼んでください」という祈りに変わった。最期は「コ
ロリ」と逝くのが母の願望だった。「私が寝たつきりになつたら注射で
死なせてくれ」と医者をしてる弟に命令口調で言つていた。願望通
り、「ピンピン、コロリ」の最期だった。ぽんと肩をたたかかれて「もう
いいじゃないか」と言われ、「はい」と喜んで旅立つた感じである。死
神に見送られて三途の川を渡り、お父さんに迎えられ、あの世での新

婚生活を始めていることでしよう。よかつたね！ばあちゃん！

人は生まれたが最後、死に向かつて歩み続けなければならぬ。何人たりともこれを断ることは出来ない。

徳川家康公は、「人の一生は重荷を負うて遠き道を行くがごとし」という人生訓を遺している。これをもじると「人の一生は死を負うて遠き道を行くがごとし」となる。

荷物なら下ろすことが出来るが、死は決して下ろすことが出来ない。死は、前にある。前にあることは誰でも知っている。しかし誰も見たことはない。どのあたりにあるのか、はつきりしない。古希を迎えたドウダンミン男は、近づきつつあることは、体のあちこちが教えてくれる。物忘れがひどくなった。眼鏡がない、財布がない、何々がない、もの探しで、トウジの迷惑にまでなっている。歯は欠けて無い、耳も遠くなる。「春が来た」の童謡をもじると、「死が来た、死が来た、どこに来た、歯に来た、目に来た、耳にも来た。死が来た、死が来た、どこに来た、足に来た、膝に来た、脳にも来た」、なーんちゃつて！

同級生が倒れたり、死んだり、同年配の年老いた姿を見ると、そろ

そろ「俺も・・・」と。しかし、なぜか危機感を持ってない。こんな
のんびりしていいのだろうかと思うときもあるが、そのほうがいいの
だという声も聞こえる。

「死」は、向こうからやってくるのではなく、こちらから歩いて近づ
いていつているのである。人はそれを知らないだけである。死に向か
って毎日歩いていく。知らない方が幸せである。

死は前にあつて、後ろからやってくる。あー、おもしろい。

いつか来るXデー 誰も知らないXデー

シタリガセンスル ヤーセンスル

平成十八年六月記

鐘が鳴る

「邑に不学の戸なく家に無学の人なからしむ」と、明治五年学制がしかれ、全国津々浦々に学校が建てられるようになった。教員養成のために師範学校が建てられ、授業料の減免処置などの優遇策を講じて徳川三百年の眠りから覚め、西欧列強に追いつけの大号令が発せられた。教員になれば高い給料も得られるので必死に受験勉強をした。特別に補習をして集団で全員合格させたという快挙話を黒田純一先生から聞いたことがある。

明治四十三年一月生まれの茂義（父茂徳の弟）は優等生で埼玉師範学校にいった。在学中に肺結核にかかり、「危篤」の電報が来た。茂徳はとるものもとりにあえず、サバニを貸切り、漕いでもらって運天港に渡った。

運天港の名前の由来は、源為朝が運を天に任せて上陸したからだといわれている。茂徳は、茂義の命も運を天に任せざるを得ないと思いつながら、あせる気持ちを抑えることはできなかつた。着いたのは月

明かりのない夜中だった。付近の民家を起こし、事情を話して名護までの道案内を頼んだ。カンテラをつけ、ハブ撲殺用の用心棒を携え、小道を行った。気がせくばかりで恐さなどなかった。

名護に着いたときは、夜が明けていた。案内人に丁寧に「お礼を言つて謝礼を渡した。親切な人で、その後の道程も詳しく教えてくれた。」名護から那覇まで馬車で行った。那覇からは蒸気船だった。

茂義は、せんべい布団の上に青白く、虫の息で横たわっていた。言葉はなかった。茂徳も掛ける言葉が見つからなかった。間に合つてよかつたという安堵感だけがよぎつた。ややあつて、「ヤカ、トオトウ」と茂義がか細く言った。それが精一杯だった。涙が一筋流れた。当時肺結核は死の病だった。茂義は敬虔なクリスチャンだった。「鐘が鳴る、鐘が鳴る、教会の鐘が鳴る」が、茂義の最後の言葉だった。祈りとともに安らかに天に召されていった。

茂徳は白い壺を抱いて帰った。昭和三年七月のことである。

平成十九年四月記

墓碑の向き

お釈迦様は、沙羅双樹の下で頭は北、顔は西に向け、右脇腹を下たにして入滅した。葬式ときは死者を北枕に寝かせる。埋葬するときも頭を北にする。かねて北枕で寝るのが忌み嫌われるのはこうしたことに由来するからなのである。北枕は、起きあがったときに南向きになるからという説がある。棺桶は北枕の状態で埋めるが、社は南向きである。

昔、墓碑を建てた人は、ブギンシャ（分限者）で、誰もが建てることのできたという訳ではなかったと思える。その墓石はチブル石（丸く大きなサンゴ礁石）で、削って名前を彫り込んだものだった。今も見受けられる。

平成十五年に火葬場ができ、納骨堂の建設ブームになった。埋葬の必要がなくなり、墓の敷地いっぱいには豪華な納骨堂を建てるところが多くなった。先祖供養、そしていつかは自分も入る処、喜ばしいことである。ドウダンミン男が納骨堂を建てたのは平成九年九月である。

建てようと思つたのは、納骨瓶の蓋を開けてみると砂がいっぱい吹き込んでゐる上に、頭蓋骨の中にヤモリの卵の殻がいっぱいあつたから、これはいかんとすぐ建ててもらつた。納骨堂の中に人が入つて、しかも高さ1呎程の納骨瓶がそつくり収納できるように注文して造つてもらつた。プットイ（墓碑名石）は、ちよつと不釣り合いにはなつたが父が建てたものを大事にしてそつくり載せた。

墓碑の向きは当然南向きだとばかり思つていた。ふと見ると東、西、南といろいろあつた。西方には極樂浄土があり、阿弥陀如来の仏様がいらつしやるといふ。東方には病氣を治してくれる薬師如来の仏様がいらつしやるといふ。どちら向きに建てるのかは大切で、考えがあつてのことだろうと思ひ、調べてみることにした。寺崎墓の墓碑は、総数六十六基のうち四十七基（七十一割）が南向き、九基（十四割）が東向き、七基（十一割）が西向き、三基（五割）が西向きであつた。南向きとは、「〇〇家之墓」のような碑銘が南に面し、人は北を向いて礼拝する形のものである。宇勝墓とハキビナ墓はそろつてみんな南向きだつた。これは墓地整備をするときに組合員が話し合つて設計の段

階からそのようにしたものと推測できる。

茶花墓は、寺崎墓と似た傾向にあったが、前浜（西・東）、中金久、舟倉、黒花（西・東）墓は圧倒的に南向きが多かった。中には入り口をかえてわざわざ北向きにしたのもあった。きっと考えがあつてのとだろ。墓碑をどこに向けるかは、墓の入り口や形等も要件になる。

強力無双のサービ・マートウイはその遺言により「安田（アダ）に向けて建てられ「安田墓（アダンバー）」と呼ばれている。

北山王の後裔（こうえい）の武将といわれる大道那太の墓は「国頭墓（クンジャンバー）」と呼ばれ、国頭に向いている。ここだけの話だけども、二人ともヤンバルに彼女がいて夜な夜なくり舟で通つたとか。

私の墓には曾祖母から祭つてある。それより先の先祖は別に祭られてゐる。しかし、私の生命は無限の過去からつながっている。そして無限の未来へとつながる。その永遠の生命の象徴が墓である。墓参りは、先祖と直接向き合い、祈り供養するところである。努めて大事にしたいものである。神様とて墓参りもせず、こちらの願い事ばかりでは快く思わず、見守つてもくださるまい。平成十八年九月記

サーシマガトウ (逆さまこと)

親友以上の付き合いをしている人が、危機的狀態を脱して元氣に退院してきた。父親は早くに他界し、高齢の母親が人一倍慈しんできた息子だった。横着者のトウラは、そのお母さんに「サーシマガトウ（親より先に子が死ぬこと）にならなくてよかった」と言ってしまった。お母さんは一瞬戸惑い「ガシテイボ（そうなんだよ）」といった。トウラは悪戯の過ぎたと後悔したが後の祭。快氣祝いの酒がまずかった。その一年数か月後、こともあろうにその友が急死した。トウラは、母親にかける言葉なく、顔を見ることもできなかつた。数十年後の今もそのとき言った言葉が、針になって心に突き刺さったままである。サーシマガトウとは、死や死にまつわることである。①あの世はこの世の逆さまで、サーシマガトウと忌み嫌われる。着物を裏返しに着たり、えりの前あわせが反対であったり、北枕にしたり、ちよつとしたことでも気にする人は忌み嫌う。②子が親に先立つことは順序が逆でサーシマガトウの最たるもので、親不孝の最たるものである。

通夜は、近親者や親交者がしめやかに故人を偲ぶものだった。肉親は、夜通し明かりをつけ、魔物に魂を取られないように交代で寝ずの番をする。

近年の通夜は、大勢が集まり、昔と趣が違ってきている。通夜の儀が終わると、喪主や肉親等は門に出て並び、帰る弔問客にお礼を言っているところがある。喪家の方々は、慎み深く、奥に籠り、喪に服してはいるのが本来の姿ではないか。表に出て客を見送るのは、場違いではないかと、ドウダンミン男には思われてならない。公民館結婚式のとき、終了後、新郎新婦をはじめ親族が廊下に並び、御礼を述べる。その形式を真似たのかどうかわからないが、お祝いと悔やみではまる反対である。グシヨウ送りは「サーシマグトゥ（逆さま事）」といわれ、日常の反対作法をする。識者が「門に出て見送りなさい」と命じてこれをさせているところもある。「いいことじゃないか」という人もいる。はやりだすとやがて定式になる。移ろい行く世相である。

年末に「喪中につき年末年始のご挨拶をご遠慮申し上げます」の葉書をいただく。一年間の慎みである。

近親に死者があると世を避けて家に籠り、身を慎む一定期間が忌中である。公の場や祝い事には遠慮する。これには相手に対するはばかりもあると思う。

与論十五夜踊りの踊り子は、大祭の前はキエー（禁忌）のため葬式には参列しない。正月ニゲーや八月ウガンのある家庭でも禁忌をする。神様の前に穢れた身では失礼で、キエーしないのでぞむと崇りがあると思われている。十五夜踊りの演目に、顔を隠して踊るのがある。これは、その昔踊り子は、下級武士であったために、殿様に顔をさらけ出すのは失礼に当たるからだと聞いた。葬儀において、本土では女性の近親者は黒のレースで顔を被い、与論では白い布で被って送っていく。慎みの体现であろう。

サーシマグトウありませぬように 被えたまえ 清めたまえ

平成十九年三月記

道しるべ

故郷与論島を出でて、幾多の苦難にもめげず刻苦勉励し、法曹界、医学界、教育界、政界、財界など各界各層で活躍し、功績をあげた先人は多い。こうした大先輩方の生き方は、近くは直接に見て学び、遠くは聞いて学び、人生の道しるべとなる。その感化力は偉大である。中学校、高校卒業生の就職斡旋、度々の陳情・研修・競技団体の世話・応援など滅私奉公の功労は絶大である。また、与論島における幾度とない記念事業には多額の寄付をし、平常における寄贈等物心両面にわたる支援は限りない。しかし、これに対する返礼は、ほとんどなされていらないと思われる。過去の各種発刊物を参考にして、主に島外者を中心に、また忘れてはならない物故者をあげた。業界種によっては現在活躍中の方も加えた。人物名をあげるについて、書き手の独断や調べ不足、加えて当人に断り無く掲載するなど失礼のだんが多々あることは平にご容赦願いたい。ただただ後輩の道しるべになることを切望して、賛仰敬慕しつつ列挙した。

《名譽町民》

有村治峯（昭和四十八年推戴）
西田當元（昭和四十八年推戴）
山下平志（昭和五十四年推戴）
龍野通雄（昭和五十四年推戴）
伊藤佐江吉（昭和五十六年推戴）

《町民榮譽賞》

益田元甫（古里出身）
池田政敏（茶花、画家）

《勲章受章者》

野田（鶴）実治（城出身）勲二等。京都帝大第一号。
谷山新良（那間出身）勲三等。京都帝大第二号。経済学博士
有村治峯（茶花出身）勲四等旭日小綬賞、紺綬褒章
益田元甫（古里出身）勲四等瑞宝章

川畑秀吉（古里出身）勲四等瑞宝章

大内森業（茶花）勲五等瑞宝章

龍野通雄（西区）勲五等瑞宝章

大原里奥（古里）勲五等瑞宝章

竹内得吉（茶花）勲五等双光旭日章

川畑森城〔那間〕勲五等瑞宝章

喜山盛治（茶花）勲五等瑞宝章

岩山新二（朝戸）勲五等瑞宝章

川畑茂（西区）勲五等双光旭日章

谷山慶介（那間）勲五等双光旭日章

山下勇夫（茶花）勲五等双光旭日章

竹下茂徳（那間）勲五等瑞宝章

坂本久登美（朝戸）勲五等瑞宝章

永野平治（茶花）勲五等瑞宝章

若松光茂（城）勲五等瑞宝章

鶴幸司（城出身）勲五等瑞宝章

川畑芽出雄（茶花）勳五等双光旭日章
堀 円治（朝戸出身）勳五等双光旭日章
山 市郎（叶）勳五等瑞宝章
喜山輝三（茶花出身）勳五等瑞宝章
南 仁義（茶花）勳五等瑞宝章
山 富英（那間出身）瑞宝双光章
町田原長（叶）勳六等单光旭日章
山下平志（茶花）勳六等单光旭日章
勇清渡美（麦屋出身）勳六等
竹下徳沢（那間）勳六等瑞宝章
裁原富吉（茶花）勳六等单光旭日章
有村泰治（茶花）勳六等单光旭日章
竹村福栽（朝戸）勳六等瑞宝章
喜村政森（立長）勳六等瑞宝章
大角龍也（西区）勳六等单光旭日章
金井清蔵（城）勳六等单光旭日章

阿多繁 (那間) 勲六等瑞宝章
川田作福 (立長) 勲六等瑞宝章
町元按司雄 (那間) 旭日单光章
有村悦弘 (茶花) 瑞宝单光章
松山俊一 (茶花) 勲七等瑞宝章
野口スミエ (茶花) 勲七等宝冠章

喜山盛治 (茶花) 藍綬褒章
川畑芽出雄 (茶花) 藍綬褒章

大島教育事務局が、各市町村の代表的人物として発行した「先人に学ぶ」の本の与論出身者は、次の方々である。

上野応介 (第二代与論村戸長。移民の父)

東 元良 (口之津移民団長。移民の父)

大野好文 (県議会議員)

野村政尚 (医師、鹿児島市谷山で開業。県議会議員三期)

西田當元（復帰運動に情熱と至誠を貫いた人）

龍野通雄（先見と信念の政治家）

伊藤佐江吉（満州開拓移民団長。田代町盤山開拓に貢献した人）

益田元甫（「誠」の教育に一生をささげた人。十七年間高校長）

有村治峯（奄美経済界の重鎮、南海の海運王）

山下平志（生涯を島の発展に捧げた「至誠」の人）

各界各層に輩出した与論島出身の人物。

《法曹界》

裾分正重↓苦学力行。日本大学を首席で卒業、銀時計を受けた。

弁護士、各地裁判事を歴任。

野田（鶴）実治↓京都帝大与論第一号。各地検、高検の検事。岐阜県

検事正。勲二等瑞宝章受章。

裾分一立↓東大与論第二号。最高裁判所家庭局長。判事。正重の長男
松村博文↓与論高校から九大卒。東京弁護士会・弁護士。日弁連コン
ピュータ研究委員、刑事弁護士。

川畑 毅↓与論高校から中央大卒。東京地検検事

《司法書士・公認会計士・税理士》

喜山輝三↓司法書士、税理士。鹿児島県司法書士会会長・同全国副会長。勲五等瑞宝章。

池畑福栄↓税理士、池畑税務会計事務所長。東京公害防止管理者。

行政書士、社会保険労務士

川上玉峯↓司法書士、行政書士、川上事務所長

児玉祐典↓司法書士、行政書士開業。警視庁警部補

森 正人↓森総合事務所・森経営相談所所長。税理士、行政書士、経営コンサルタント。

原田献三↓原田司法書士事務所所長。司法書士、行政書士。

吉井清信↓公認会計士

有村昌造↓公認会計士（有村栄男の三男）

《警察・検察》

川畑秀吉↓東京都警察警視長。勲四等

椛山喜美信↓警視庁警視。中央区区議會議員。

龍野禎順↓東京警視庁警察官

《大学教授・助教授》

谷山新良↓京都帝大与論第二号。大阪大教授。経済学博士。勲三等。

裾分一弘↓九大卒。学習院大学教授。裾分正重の次男

勇清渡美↓警視庁警察大学校教官、警視、勲六等

我謝猛俊↓茨城大学教授、茨城大名誉教授

高井高盛↓北里大教授

川畑敬志↓広島工業大学教授

白井洋子↓東京国際大学教授。奄美女性初の文学博士。

町 博光↓広島大学助教授

東以和美↓千葉大教授

西栄二郎↓横浜国立大学助教授。理学博士。

山田 実↓霧島女子短期大教授。幼児教育短大教授。

栄喜久元↓県立奄美図書館長、県立図書館副館長、鹿児島経済大教授
池田 誉↓画家。アメリカの大学講師
池田誠良↓陶芸家。大学講師
山喜高秀↓志学館大学大学院准教授
市来正彦↓日本大学医学部准教授

《政界》

大野好文↓鹿児島県議会議員
野村政尚↓鹿児島県議会議員。医者。
伊藤佐孝↓名瀬市議会議長。与論町教育長
椋山喜美信↓東京都中央区区議会議員
土持正豊↓東京都議会議員
川畑里住↓大牟田市議会議員
堀 円治↓大牟田市議会議員
川畑昭二路↓大牟田市議会議員
幾村清徳↓鹿児島市議会議員

《実業界》

有村治峯↓大島運輸をはじめ二十七社の会社設立・総帥。与論出身の
立志伝中の実業家。名瀬市名誉市民。与論、喜界、瀬戸内、
天城、和泊、知名町名誉町民。勲四等。

有村 喬↓有村産業、有村倉庫社長。

谷山龍男↓山下新日本汽船常務取締役。山友汽船社長

沖 正忠↓大洋漁業長崎支店長。大洋漁業専務取締役

龍野七郎↓日榮研磨社長

川畑 敬↓日本証券会長

池畑福直↓共和石油・共和自動車整備工場（株）創業社長

白井盛永↓富士興業社長

高坂先峯↓高坂金属会社社長

武東範成↓武東工務店社長

伊藤実静↓伊藤鉄工所社長。琴平神社鳥居（上の方）奉納者

本 恵三↓大洋物産沖繩支店長、

児玉新森↓貿易商会社長

《医学界》（順不同）

野村政尚

大野好文

林 清重

林 健也

西田豊作

村田豊次

池田 弘

柳田琢也

川畑駿俊

柳田敏孝

裁原伸一郎

竹下岩男

森新一郎

喜山克彦

町多賀雄

増尾光樹

柳田美津郎

柳田浩子

川畑康成

山田正彦

山下隆夫

山本和儀

市来真彦

貞村ゆかり

貞村祐子

徳田隼人

児玉 多

児玉好文

南 周作

基 俊介

富士川浩祥

《齒科医師》

村田鉄雄

福永 馨

福永 恵

児玉伊佐雄

河野哲也

貞村淳一郎

《看護婦長》

田中裕子

平 典子

川村芳子

児玉マツ

《産婆》

森 十へ

川畑千里

猿渡和江

荻野静香

《獣医師》

南哲郎

有元雅春

基信二郎

《教育界高等学校長》

益田元甫↓十七年間県内六つの高校長。東串良町と与論町の教育長。

高井高盛↓東京都内高校長、北里大教授

仲野誠助↓福岡県立香椎工業高校長、筑後市教育長

西田栄吉↓県立古仁屋高校長

竹吉広一↓愛知県内高校長

本山文雄↓県立古仁屋高校長

《教育界小・中学校長》(順不同)

藤田教夫	向井範男	田中国重	青山巖豪	益山政喜久	川畑広吉	龍園福秀	山市郎	田畑吉之助	白尾好之助	伊藤佐孝	猿渡章	平兵一	山西勝	川畑龍吉
白尾克彦	町岡光弘	福永敏和	田畑宮卿	池田テツ	我謝みどり	川口当悦	山下勇夫	川田岩吉	山田敏雄	川南涉	福島健	竹園部	東可梯	金井清実
富敏紀	川田繁吉	竹下菊雄	喜山富三	北原豊一	光才池	阿野栄	福永政宜美	柳田薫	黒田純一	佐多仁熊	南情秋	佐藤為村	麓喜久信	
竹下賢	山元宗	嘉味田洋祐	竹下徹	田畑栄次	町新助	山富秀	山下肇	竹内得吉	谷山正夫	山下為吉	坂本久登美	大内森業	酒匂川高	
川畑朝一	川村典義	白尾健二	有馬節光	大馬英俊	竹下德里	福富雄	染川繁夫	竹下茂徳	竹下直人	光一夫	白尾以和憲	麓桓茂	染川田助	

《所長等》

染川弘光↓大島紬技術センター館長。大島染色指導所所長。
阿多川助↓大島産業鹿兒島事務所所長、県農業会主事
竹下喜久直↓県療術師会会長。療術師（電気、光線、指圧、刺激療法）
林 文助↓大牟田失業労働組合委員長。全国自由労働組合執行委員
山下敏捷↓名瀬貯金保険出張所所長。鹿兒島地方貯金局課長
川畑村中↓鹿兒島県織物工業協同組合理事長

《農業普及・技手等》

益山義忠↓糖業技手
佐多久保悦↓糖業技手
池田実尚↓農林技手。琉球政府技官。農園業
出村岸富↓農林技手。名瀬市農業協同組合長。
林 文次↓農業改良普及員
竹林金重↓養蚕技手
麓幸子↓養蚕技手

川村並平↓測量士

《船長》

川畑谷城

原田成治

大野利弘

池田栄吉

川上武志

山田池直

川畑村中

谷山新平

山下登志秀

《スポーツ界》

町栄二郎↓剣道高校日本一（町万太郎の次男）

本 博国↓アトランタオリンピック選手、ボクシング、ミドル級。

入来武久↓国際空手道連盟極真空手、中量級、全日本優勝

田畑 隆↓キックボクシング、日本ウェルター級チャンピオン

玄岡正充↓鹿実甲子園4番打者出場。ヤクルト入団9年間活躍

池村勇隆↓レスリング。モスクワユニバーシアード国内予選2位

モントリオールオリンピック予選3位

白尾秀人↓サッカー選手。国見高校で全国優勝。アジアユニバーシア

ード大会出場、ヴァンホーレ甲府入団

横地 愛↓新体操。全日本新体操クラブ選手権大会個人総合優勝。

釜山アジア大会出場。

川上納里↓競輪競技者A級

《芸術》

南 安広↓彫刻家

池田政敏↓画家。日展入選

池田 誉↓画家、アメリカ大学講師

池田誠良↓陶芸家、大学講師

《歌手》

直木みち子

小宮みすず

川畑 旭

田畑哲彦

《作家》

基佐江里↓スポーツ作家

《郷土史家》

増尾国恵

栄喜久元

山田実

町田原長

川村俊英

野口才蔵

菊千代

《現代の名工・特殊技能》

久 豊治 ↓ 豊職人 (現代の名工)

川畑恵美子 ↓ 大島紬工芸師

阿野益雄 ↓ 伝統建築技能士

《杜氏》

我謝孟恒、福永忠重、有村雅雄、福地守光

《神官等》

大野上蔵

麓偵光

上間兼一

市来加平

鬼塚高太

山田喜野志

川畑里住

盛山新一郎

岩村康弘

沖家寿

市来快延 (海圓寺)

《特筆的人物》

川村景明↓東大合格第一号

川畑玲奈↓東大合格女性第一号

西田マツ↓女手一つで二人の子供を医学博士を育て上げた。

野沢マゴ↓平成十八年長寿者鹿児島一

嶺島峰永↓大正十一年から昭和二十三年まで茶花小学校の使丁とし

ての無私の奉仕及び功績は絶大。平成十八年長寿男性県一

和泉松応↓永年与論小学校の使丁として、謹厳実直、無私の奉仕者

上野正夫↓日ソ友好協会員、日本とソ連の架け橋

平 康邦↓フルブライトアメリカ留学生。カナダ大使館勤務、日本と

カナダの架け橋

町清之新↓田代町盤山開拓団長、田代町議会副議長

有馬功↓田代茶ブランド功勞者、田代町議会副議長

《全国与論会歴代会長・幹事長》

代 会長名 幹事長名

初代 西田當元 池畑福栄

二代 伊藤実静 川畑里住

三代 龍野七郎 川畑里住

四代 本恵三 武東範成

五代 堀円治 林文助

六代 益田元甫 白尾以和憲

七代 山下為吉 佐藤持久

八代 本恵三 田畑豊一

九代 染川弘光 西田栄太郎

十代 児玉新一 幾村清徳

十一代 山田一男 竹内幹一

十二代 武東範成 高田俊秀

十三代 佐藤持久 叶生二

十四代 池田住吉 高井泰彦

十五代 竹内幹一 益山哲夫
十六代 西田瑞穂 高橋肇
十七代 西田栄太郎 坂元秀憲
十八代 田畑豊一 武東愛一郎
十九代 竹本登 竹内英健

平成十九年一月記